帝國新國文

卷六

375.9
Fu10
資料室

42488
教科書文庫
4
810.
44-1933
20000
4051.7

資料室

文部省檢定濟
昭和八年八月十四日 實業學校國語科

375.9
Fu10

東京帝國大學教授
文學博士 藤村作編

帝國新國文

卷六

株式會社 帝國書院

（第一課參照）

田家の朝

（田畑秋澤筆）

廣島大學圖書之印

廣島大學圖書館
47517

帝國新國文　卷六

目次

一　田家の朝　相馬御風　一
二　朝　川路柳虹　六
三　自然の愛　藤岡東圃　八
四　空ゆく雁（曾我物語）　一三
五　南極の上を飛ぶ　一八
一　一八
二　二五
六　青年の覺悟　澁澤榮一　二九
七　大和の秋　佐々木信綱　四一
八　秋深し　横瀨夜雨　四五

九　俚諺　大西祝　四七
一〇　名器を毀つ　薄田泣菫　五三
一一　松の下露（太平記）　六一
一二　夜叉王　岡本綺堂　六七
一三　夕靄の野　中西悟堂　七九
一四　わが生ひ立　渡邊崋山　八二
一五　蜜柑　芥川龍之介　八九
一六　故國に歸りて　島崎藤村　九六
一七　野に出でよ　島崎藤村　一〇五
一八　眞理　高山樗牛　一〇六
一九　内藏助と主税　大佛次郎　一一〇
二〇　義士討入を報ず　榎木其角　一一八
二一　木曾殿の最期（平家物語）　一二一
二二　平原を行く　鶴見祐輔　一二九

二三　近世の歌　島木赤彦　一三七
二四　日本の民謡　三宅雪嶺　一四六
二五　勝敗　一三三

目次終

廣島大學圖書之印

相馬御風
名は昌治
新潟縣の人
文學者

一　田家の朝

筧をおちる水の音を聽きながらいつとなしに夢のない深い眠に沈んでゆく。――さうした田家の夜の靜けさも懷しいが、それ以上に私は朝の寢覺めに筧の水の音を聽くすが〳〵しさを好む。

筧の水の音は田家の夜と朝とを詩味あらしめる爲には、なくてはならぬ要素のやうにさへ私は思つてゐる。それは僅かに細い一本の竹筒の口を洩れる水の音でしかないが、しかも何といふ大きな魅力をそのうちに藏してゐることであらう。

それが一家の者の生命をつないで行く上になくてはならぬ貴いものであることは云ふまでもないが、それを外にして私達には山の水を取り入れる爲の筧を持つた田家の詩味が、たまらなく懷しくも又うらやましくも思はずにゐられぬのである。

朝の寢覺に我知らず耳傾ける筧の水の音のすが〳〵しさ。それが筧をおちるのでなくて、直に山腹の岩間からこそ〳〵と流れ出る泉であれば、その音のすがすがしさに神祕な味はひさへも加はつて、私達の心に一層たぶとい靜けさを與へてくれる。

水の音を聽きながら眠り、水の音を聽きながら目覺めた刹那の心の靜けさは、田家に住む人々に惠まれた大自然の最も大きな恩惠の一つである。

外のもゆく馬の足音鈴のおと夜はほのぼのと明けてゆくらし

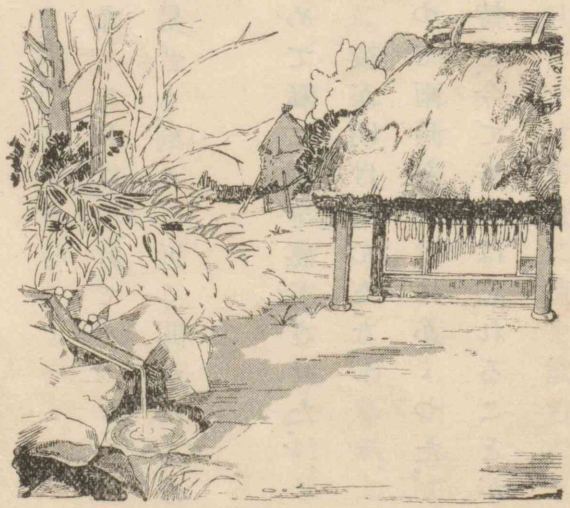
こんな歌を私は嘗て或山奥の村家に泊めて貰つた時詠んだことがあつた。

その時もやはり私の寢てゐる枕の近く筧をおちる水の音がしてゐた。

安らかな眠りから覺めたばかりの私の耳に、その水の音はおのづと爽かな響を傳へた。私は何と言つて見ようもないすがすがしさと、靜けさと、安らかさとに心身を抱かれながら、その水の音に聽き惚れてゐた。

部屋の中はまだ暗かつた。しかし私はそれが眞夜中であるか朝であるかといふことすらも考へなかつた。私はたゞうつとりと安らかな寢覺の快さに浸つてゐた。

その時、ふと私はどこからともなく響いて來る鈴の音を聞いた。



田家

そしてそれが馬の頸に下げられた昔ながらのあの鈴の音であることを私はすぐにたしかめることが出來た。

ヂャラン、ヂャラン、ヂャラン……

鈴の音はだん〳〵近づいて來た。それにつれてバッタン、バッタンといふ藁の沓をはいた馬の足音も、刻々に近く聞かれるのであつた。

その馬の鈴の音と足音とが、初めて私に朝を感じさせた。

「あ、もう草刈に行く人がある。夜が明けたんだな。」

さう思ふと同時に、私は起き上つて雨戸を明けにかゝつた。

あの時のすが〳〵しかつた氣持を、今でも私は忘れることが出來ない。

山家に泊つて、朝、谷川へ顏を洗ひに行く氣持も、私にはたまらなく懷しい。

清流に口をすゝぎ、顏を洗ひ、頭を冷やすことの快さはいふまでもないが、私はそれ以上に清流に口をつけて直に流を飲むことの快さを愛する。

草の上に、又は岩の上に寢そべり、顏を清流の上に差し出して流に口づける。水は容易に口の中には入らないものであるが、しかしさうして飲む水の味と、手や何かで掬つて飲む水の味とはまるで違つてゐるやうな氣がする。

「流を飲む。」

さうした氣持だけでも既にうれしいのである。

手ですくひ上げた水に、曉の空の光の映つた感じもいゝ。

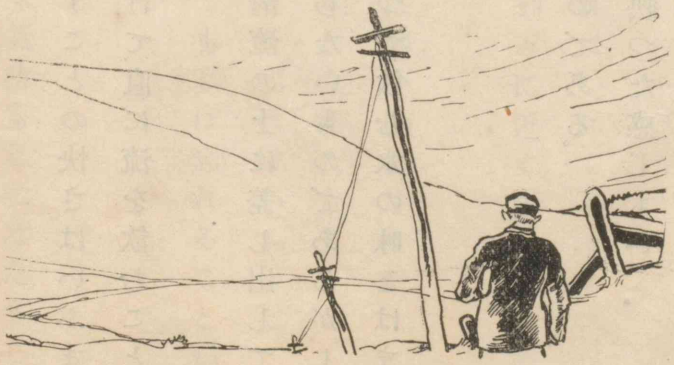
—鄉土に語る—

名は誠
東京の人
詩人

二　朝

朝は晴れたり。友よ立て。
空ははるかに色澄みて、
高きおもひにくもりなき
聖者のひとみしのばしむ。

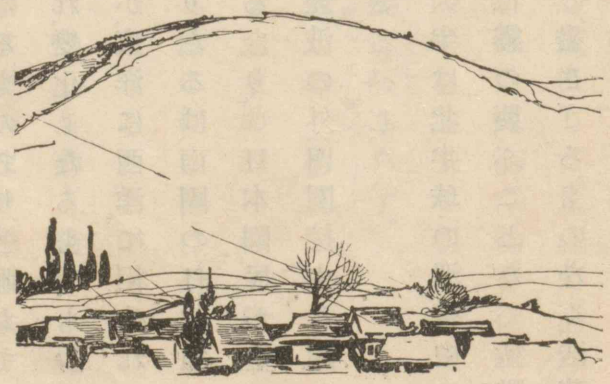
朝は晴れたり。ロすゝぎ、
この曉の生まれゆく
空のさなかに神ありと
靜かにおもへ、汝が胸に。



川路柳虹

日に照らされて、煙るもの
遠き山なみ、町の屋根、
今勞働のほめうたの
さけびとも聞く汽笛の音。

自立自營
朝は晴れたり。質問　いざ立たん。
われら賴むはみづからの
いとなみつくる力のみ。
いざ、わが路を踏みゆかん。



藤岡東圃
名は作太郎
金澤市の人
國文學者
文學博士
明治四十三年歿
（年四十一）

三　自然の愛

藤岡東圃

國民の特性は、初よりその人種に固有なるものありと雖も、またその住處の地勢・氣候に由つて、馴致せられ、變化したるものも少からず。そのもと同じき印度・歐羅巴種族が、東洋に西洋に相分れて、寛猛・柔剛匹を異にする種々の國民と成りたるは、南國の日、北地の風、山海さまざまの風物が、これを養ひたるなり。日本國民が全一體としてよく結合せるも、また蒼々たる煙波の外、四圍接する國なき、その地位に影響せられしこと少からざるべし。

日本は東洋の樂園と稱せらる。國の大半は北半球の溫帶中に位すれば、氣候中和にして山水明媚、瘴烟・毒霧の襲ふことなく猛獸・毒蛇も棲むこと稀に、曠茫たる平原眼界の盡きざるものなく、浩蕩たる長流、數百里の山野を浸すを見ず、雄大・瑰偉なる大陸的風致に

乏しと雖も、到る處優麗・嫻雅なる勝景あり。東海の岸を縫うて進めば、富士を前にし、後にして、長汀曲浦浪靜かに砂滑かなり。瀨戸內海に船を行れば、松の島を迎へ、巖の嶼を送りて、朝日・夕日に移ろふ景趣は、應接に暇あらず。

長汀曲浦

陽春櫻あり、晩秋菊あり、初夏の梢に懸れる藤波は、紫の綾を池水の鯉に織り出し、季冬の森、鵶の聲暗き蔭に、紅の椿は拾ふ兒なきに切りに落つ。美なるかな山河、これに接するものは怒れる心も和ぎ、結べる思も解けぬべし。山川は優美なり、穩和なり、これに馴れ、これを愛する國民の、また優美にして穩和なる特性を有するに至れるは、卽ち自然の感化が致す所

なるべし。

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豐饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美穩和なる山川は常に瞼上に愛を湛ふるが如し。接するものは之に親しみ、親しむものはこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ者は、愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲むわが國民が、その一木一草をなつかしむは、自然の情なるべし。

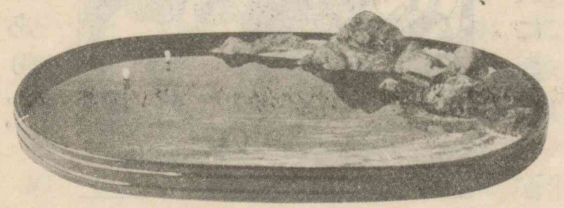
都會の緣日に張りたる夜店には、食品も玩具も數ふるに足らず、露を帶びたる植木の葉の翠、花の紅こそ、カンテラの光に映えて瑞瑞しく鮮かなれ。そを中流以下の市民は、あれこれと擇び求めて、座敷に飾り、庭に植う。裏長屋の道具の据ゑ處もなき窓前にも、稗蒔を作りて田舍の面影を偲び、破れ鉢に唐の芋を育てて、やさしき

野趣を樂しむ。長火鉢のわきの福壽草は、鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は、風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて自然を愛することかくの如きは、他の國民にその匹ありや。

わが國民は自然を愛賞するの餘り、またよくこれを尊重せり。尊重するものには悅んで服從す。かれらは漫に人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。この服從を以て屈伏といふ勿れ、悅服は自動的なり。屈伏するものは、不正なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如く、悅服するものは、從順なる兒孫が寬仁なる家長を見るが如し。任意的なるものは、毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て

夜店

喜んで己の意とす。花を愛する趣味の、われらと西洋人との間に如何に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞すべきよりも、峰に渡り、川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もそのまゝに願はくはこれに置く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて、歡興を助くるに、一は床上の盆石・盆栽に、自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るにも、彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋草花のチウリップ・ヒア



盆石

シンスなどその葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろわれらの眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花・尾花、その花に何の美はしきことかある。されどあるかなきかの黄花を捧げて、なほたよ〳〵と下蔭の蟲の音にもゆらぐ樣、ますほの色はやがて白くほゝけて、霧に濡れ、風に靡く趣は、われらが胸に浸みて忘れられず。日本人が花を愛するは、その外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり、直ちに自然の懷にわけ入つて、その眞意義を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。

—國文學史講話—

四 空ゆく雁

（曾我物語）

頃は人皇第八十一代安德天皇の養和元年、新玉の年立返り、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。ある夕暮、箱王は母の膝の上

母　名は滿江夫河津祐泰の死後二子を連れて曾我祐信に再嫁した
曾我殿　曾我祐信
工藤一萬　工藤祐經
この里　神奈川縣足柄下郡曾我中村

にたはぶれながら「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛はいづくにましますぞや。往きて拜みたてまつらばや。母御前、いざさせ給へ」といひければ、遙に忘れたる來しかたも、今更思ひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母泣く〳〵のたまひけるは「あの曾我殿こそおのれらが父にてあれ」と、心強くかたらひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは「父御前は、まことやらん『狩場より歸り給ふ道にて、工藤一萬とやらんに射られ、死に給ひぬ』と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等がこの里に在りと知らでや過ぐらん」など、おとなしく語りければ、母より始めて、女房達まで皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄

河津殿　河津三郎祐泰

弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは「あれ見給へ、箱王殿、空を飛ぶつばさも、皆別のつばさぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中、一つは父、一つは母、三つは子供にてぞあるらん。物いはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬことこそ悲しけれ。われらが父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。われらより幼きものにても、馬鞍・弓矢をもて物を射ありくことの羨しさよ。これらのことども思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞや」とて、袖に顏を差入れてさめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顏をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて「あなあさましし人もこ

そ聞け。いかに和上、萬達、夜も更けぬるに、左様にておはするぞ。とく〳〵入らせ給へ」と怖しげにいひければ、二人の者は門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に入りけり。

ある時、兄弟は竹の小弓に薄矧の小矢を取添へて、遠侍に出でてあそびけるが、明障子のありけるに二人たち向ひ、あなたこなたへ射とほして、一萬、箱王に申しけるは「われらもいつか成長し、和殿は十三、われは十五だにもなるならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ、われも射習はん。弓矢は男の一の能にあるなるぞ」と、いひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖しきことかなと人々思ひけり。

一萬が乳母、この由を聞き知りて、大きに驚きて母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子供を呼びよせ、泣く〳〵語られ

伊東入道
伊東祐親

千鶴御前
母は祐親の女

松河が淵
靜岡縣伊東町にある

石橋山
神奈川縣足柄下郡にある

土肥の杉山
石橋山の南にある

梶原景時
頼朝の寵臣

けるは「まことか、おのれらがさも怖しき謀叛を起さんと議しあふなるは。もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれらが祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館に於て失はれ給ひぬ。おのれらかゝる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。その時、千たび百たび悲しむともかなふべきか。その上、汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿なげき申して止まりたり。その故は、鎌倉殿、石橋山の合戰に打負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と二人心を合せて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされしその御恩を皆返し參らせて、『二人の幼き者共を助けて給はらん』と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、『それ程の志ならば、二人の子供祐信に預くるぞ』と、仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて今迄稀有の命を保ちたるぞ。それにつきても、

曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡すべきか。鳥類・畜類にても恩を知るとこそ聞け、況や汝等人倫に於てをや。然るを却つて曾我殿に歎きを與へんこと返すゞ〳〵も口惜しかるべし。その恩を報ぜんと思はば、速に謀叛を止むべし」と、口說きたてて誡められければ、二人の子供目と目とを見合せ、顏打赤らめて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬ所にては內々談議しけれども、人目に顯れては語り合ふこともなし。母も內々怖しき者共の心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせんとぞ思はれける。

五　南極の上を飛ぶ

一

一九二九年十月二十八日が待ちに待つた南極飛行の日である。その前日、氣候觀測係のハリスンが、明日こそ好日和であると告げたのに對して、バードも賛成し、出發の用意にかゝつたのである。

バード
リチャード・イヴリン・バード
西紀一八八八年アメリカ、バージニヤ州に生まる。
海軍少將
南極探檢隊長

出發の前夜は一同まんぢりともしなかつたが、バードは十分に睡眠をとつた。一體、その頃の南極の夜は、僅かに六時間――二十四時間中の四分の一――であり、その六時間もうすら明りがさしてゐて、普通我々の經驗する夜とはその趣を異にするのであるが、隊員達は、夜になると、とにかく休養して睡眠をとつてゐたことは勿論である。

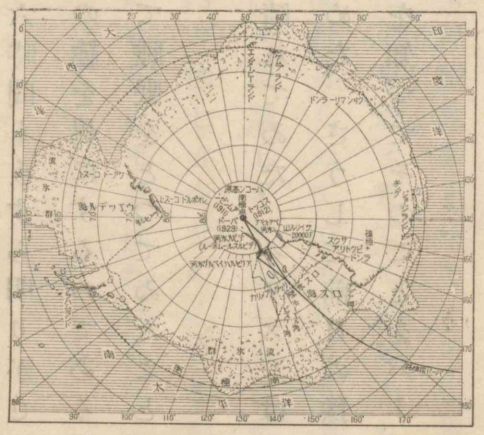
愈〻二十八日の朝が來た。空はよく晴れてゐた。ハリスンはもう一度觀測所に入つて天候をよく確めた。さうして前日の豫定に何等變更を加へる必要のないことを知つて、そのことをバードに報告した。

晝食後、係員はもう一度フロイド・ベネット號の機體檢査を行つ

フロイド・ベネット號は、三つのモーターを備へてゐた。中央の大きいモーターが五百七十五馬力、兩側の小さい二つが二百馬力づつで、三つ合せると九百七十五馬力である。機の底に開口部があつて、そこから航空寫眞の撮影を行ふことが出來るやうになつてゐた。

やがて機上に犬が乘せられ、續いて橇・スキー・食料といふ順序で積荷された。

午後三時を少し過ぎる頃、機は格納庫から辷り出た。バルチェンが先づ操縱席に入つた。續いてジューンが操縱席に入つた。それからマッキンレー、最後にバードが機上の人となつて、隊員に對つて微笑しつゝ手を擧げた。これ



バードの探檢路

が出發の合圖だつたのである。

機は轟然たる爆音とともに上昇して、瞬く間に遠い南の空にその姿を漸次縮小して行つた。

機上にある人々は、烈しい爆音のために會話を行ふことは不可能に近かつた。バルチェンとジューンとは左右の操縱席に在つて、バードの命に從つて交代に機の操縱を行つた。

機は漸次高度を增して行つた。三百米、六百米、九百米……。千八百米に達すると、稀薄な空氣の中に在つてガソリンが特別にその臭氣を發散させた。

やがて機は三千米より高い高度に上つた。マッキンレーはそこから下界の氷の原野八哩をカメラに收めた。

やがてのこと、行手に高い山脈が現れた。右にも左にも澁面を作つた斷崖と、氷で圍はれた壁とが聳え始めた。一番安全な路は

眞直に前進することであつた。しかし、それには高度をもつと上げる必要がある。

フロイド-ベネット號は、高度を上げるか、行手の岩壁に衝突するかの何れかを選ばねばならなかつた。ぐづぐづしてゐると、附近に渦卷いてゐる突風が、機體を二つに裂いてしまふやうな場合も想像されないではなかつた。

ベネット號は今や最も苦しい試錬に際會したのであつた。

バルチェンは突然叫んだ。

フロイドベネット號

「何か棄てろ！」

バードは咄嗟の間に何を棄てようかと考へ惑つた。食料か燃料かのいづれかを捨てようとまで思ひついて、さてそのいづれを捨てるべきかに又迷つた揚句、食料を棄てることに決心して、

「食料の袋を棄てよ。」

とバードは命令した。

食料の袋は直ちに下界へと投り出された。

機は見る見る上昇して行つた。やがて又、更に高い峰が現れた。バルチェンは振り返つてバードの顔を見た。今度は「何か棄てろ！」といふことを言葉に出すまでもなく、バードはバルチェンの要求を悟つていさゝかの躊躇なしに、また食料の袋を機外に投げ棄てさせたのである。機は樂々と上昇して行つた。かくてこの高い峰も百米の餘裕を置いて飛び越えることが出來た。

マッキンレーは撮影にいそがしかつた。

間もなく、機は氷河附近の荒い氣流の中に乗り入つたが、無事に

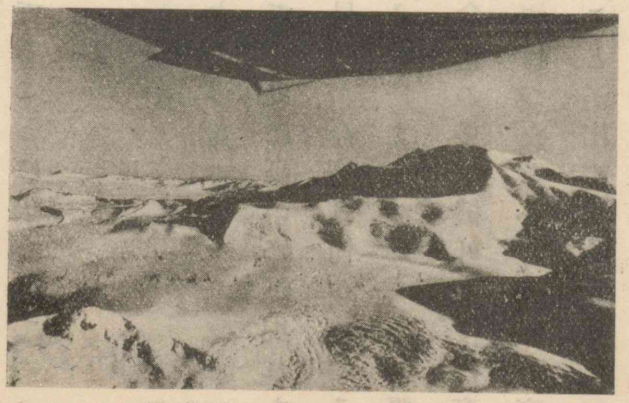
そこも通り抜けた。

食料袋を棄てゝ以來、機は南極高原の上を飛んでゐたのである。南極高原の入口にあの高い山脈があり、その山脈の中にアクセル-ハイベルグ氷河があるのである。

ベネット號から俯瞰した南極高原の容貌は、アクセル-ハイベルグ氷河に達しない以前の南極地方の容貌と少しも變らなかつた。同じ樣な朗かな太陽の光、同じ樣な眞白い雪の原野、たゞ異るのは三千米ばかりレヴェルが高まつてゐるといふことだけである。

ベネット號はリッツル-アメリカの根據地を午後三時少し過ぎ

リッツル-アメリカ



アクセル-ハイベルグ高原

南極ロス海の南ロス氷堡の上にあるバード探檢隊の根據地

七百哩　一哩は約一・六キロメートル

に出て、もはや十時間ばかりの時を過してゐる。さうして七百哩以上の行程を飛んで來た。普通我々の時間で言ふと、それは翌二十九日の午前一時頃になるわけであるが、その時、太陽はまだ十分な光線を送つてくれてゐた。

十時間！　七百哩！　もうそろ〳〵南極に着いてもいい時分である。バードは特別に緊張して機の位置を調べ始めた。さうしたら、そこが南極であつた。

この飛行に於てはすべてが豫期せざる突然ばかりであつた。突然氷河の上の惡氣流の中に入るかと思ふと、突然平滑なコースに辷り入る。さうして最後に突然南極の上に機はそれ自身の位置を發見したのである。

二

バードは人間の名づけて南極と稱する地點を數分前から豫期

してゐた。そしてそのことを他の三人にも合圖しておいた。四人はその南極の上へ來るのを、今か今かと緊張しながら飛んで來たのであるが、いよ〳〵南極の上へ來た時、それは矢張突然であるやうに感じられた。さうして信じ難いことのやうにさへも思はれた。何も變つたことがなかつた。

バード

あれだけ意氣込んで來て、今そのクライマックスに達したのに、それを現すやうな目覺ましい事も起らない。これは確かに拍子抜けのすることであつたに違ひない。

とにかく、四人は南極の上に來てゐた。四人は機の中に嚴かに

ローアルド・アムゼン　ノルウエーの大佐　西紀一九一二年に南極を探檢した

ロバート・エフ・スコット　イギリスの大佐　西紀一九一二年に南極を探檢した

佇立した。この時、四つの旗が機の上から靜かに投下された。一番最初に投下されたのは絹製のアメリカの國旗で、この旗のおもりにはアーリントン墓地にあるフロイド・ベネットの墓の石が用ひられてあつた。フロイド・ベネットはバードと共に北極探檢に行き、生きて居たらば今度の南極にも行を共にすべきバードの無二の親友である。

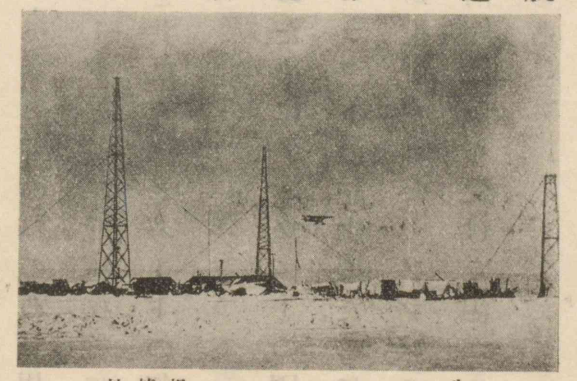
次にはローアルド・アムゼンの記念のために、ノルウエーの國旗が投下された。續いてロバート・エフ・スコットの記念のためにイギリスの國旗、最後にフランスの國旗が投下された。フランス國旗の投下は、バードが大西洋横斷の際、同國民から受けた温かい歡迎の心情に酬いるつもりだつたのである。

フロイド・ベネット號は南極を究めて今は歸路に急いでゐた。この歸航は極めて無事であつた。尤も南極を離れて間もなく、彼

のアムンゼンの命名したデビルス-ボールルーム(惡魔の舞踏室)にさしかゝつた時、突風のために、機體を縱横に揉まれたことはあつたが、別に大したこともなく通り過ぎ、往航に苦しんだアクセルハイベルグ氷河附近の高峰も歸路は樂々と飛び越えた。これはガソリンの大部分を消費して、機が輕くなつてゐたためであつて、一番高い峰を、遙かの下に望み見るくらゐの高度を保ち得たのである。

リッツル-アメリカの根據地では、バードの無電通信によつて、早くもベネット號の成功を知つた人々が、歡喜して一行の歸りを待つてゐた。

バードの一行は、リッツル-アメリカを出發してから十九時間の



リッツルーアメリカの根據地

後一九二九年十一月二十九日午前十時少し過ぎにリッツル-アメリカに歸着した。

バード以前に南極へ行つたのはアムンゼンであるが、アムンゼンは飛行機に據らなかつたので、バードと同じ行程を五十三日ほどかゝつて往復してゐる。アムンゼンの根據地はリッツル-アメリカの近くにあつたのである。

南極と北極との兩極を究めて、而も無事に生還し得た人と言ふと、バードを措いては他に一人もないのである。—「世界探檢全集」による—

澁澤榮一
實業家
號は青淵
子爵
昭和六年歿（年九十二）

六　青年の覺悟

澁澤榮一

時勢の推移によつて社會狀態が變つて行く。從つて所謂時代思想なるものは、その時の社會狀態を反映するものである。現代の青年は私共の青年時代と違つて、一般に怜悧になつて、目先が利

く樣になつた。だが、その反面には幾多の短所もあり、通弊もある。

悧巧になつた現代の青年は、餘りに功を急ぎ過ぎる嫌がある。どうかして早く世に知られようとあせり過ぎるやうである。是が爲には自家廣告もし、自己宣傳もし、機會ある毎に自分を偉く見せようと吹聽する。そして最も大切な自己の修養を閑却する傾向がある。是は現代人一般の通弊であるが、特に前途ある青年が功をあせるが如きは最も愼むべき事である。修養を怠りながら徒に功を急ぐ事は、例へば商品の質は措いて問はず、イルミネーションで廣告して、人にその存在を認められようとするに等しいものである。

現今は總てが廣告の世の中である。廣告が上手であれば商品が賣れる。殊に化粧品や賣藥などは實質よりも寧ろ廣告で賣つて居るが、人間の世に立つのは、化粧品や賣藥を賣るのとは全然譯

が違ふのである。然るに功を急ぎ、早く世に知られたいが爲に己の名を賣らうとあせる青年の多いのは、現代青年の爲に惜しむ所である。是は今の青年が餘り悧巧になり過ぎて、目先きの事ばかり考へて居る爲であつて、極端な例ではあるが、是では化粧品や賣藥と選ぶ處がないではなからうか。再言すれば、現代の青年は實質を第二に置き、修養を怠り、徒に聲を高めて名を賣り、地位を得ようとする寒心すべき傾向がある。是は第一の缺點である。

澁澤榮一

蓋し人間の思想は、單に自分の心の中にのみ蓄へて置かれる筈のものではない。況や言論の自由が國法によつて保證されて居

る以上、自分の思想を發表する事は少しも差支ないが、時と場所とを、よく考へなければならぬ。常に修養に心掛け、所謂內容の充實、實質の完成に努力して居れば、何時かは必ずこれを最も有效に役立てる時が來るのである。自ら進んで知つた振りをし、えらく見せようとする事を、自分自身では早く世に知られ、榮達をするの途であると信じて居るかも知れぬが、第三者の公平な眼から見れば、輕薄な、奧行のない人間と見られ、信賴して仕事を托する事の出來ない人物であると思はれるに過ぎないのである。之に反し、平素修養に心掛けて居る人物は、何時如何なる場合に於ても狼狽するやうな事はなく、本當に價値のある人間と云ふ事が判るのである。

支那の古聖賢は、かういふ事を言つてゐる。即ち「才能のある人の世にあるは、恰も囊の中にある錐のやうなものである。」と。是は囊中の錐は上から押されるとその尖端が現れる。それと同じ樣

に、實質の備つて居る人は、事あれば必ずその才能が顯れるといふ事を意味するものである。青年諸君はよくこの點を熟考しなければならぬ。自分の力量不相應に功を急ぐ事は、却つて將來の榮達を阻害し、蹉跌を來すの基である事を深く思ふべきである。

それから、私は現代の青年が仕事に對して不平を抱く事を甚だ遺憾に思うて居る。例へば「自分は實力があるのに世間では認めてくれぬ。俺を良い地位に使つてくれぬ。」とか、或は「私は何々の方面に關して知識を持つて居るのに、その方面の仕事を與へて呉れぬ。」と不平を言つて居る人がある。否、僅少の例外は別として、殆ど青年の悉くが、共通的にかう云ふ不平を抱いて居るやうである。併しながら、是は間違つた考と言はなければならぬ。何故かといふに、良い磁石であれば、自然に澤山の鐵を吸ひつける力を持つてゐる筈で、人間の實力も丁度これに等しく、力があれば仕事は自然

に與へられるからである。

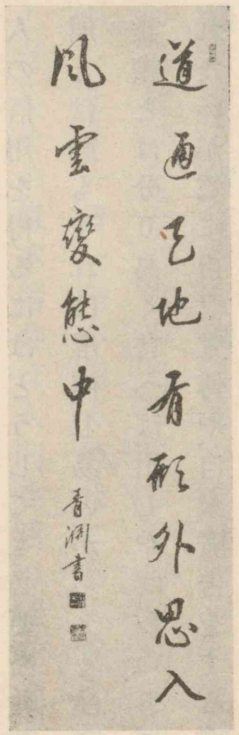
世の中に仕事は澤山にある。仕事に對して不平を言ふ人は、取りも直さず自分にその仕事を吸收する力を持たぬ人に外ならぬ。然らば如何にすればよいかといふに、與へられたる一つの仕事を、完全に、而も迅速に成し遂げる事が最も肝要である　與へられたる仕事を、迅速に、完全に成し遂げる時は、求めずして信賴せられる樣になり、第二、第三の仕事が來るやうになる。丁度良い磁石が澤山の鐵を吸收すると同じ理窟である。かくしてこそ眞に價値ある人物として重用さるゝに至り、將來の榮達を期することが出來るのである。

要するに、どういふ詰らぬ仕事でも、決して不平を吐かず、與へられた職務は之を自分の天職と思うて完全に仕遂げるやうにしなければならぬ。若し一つの仕事に對して不平を抱き怠るやうな

筆蹟
道通ニ天地一ニ
有形ノ外ル
思入ニ風雲一ニ
變態ノ中
青淵書

青年であれば、それは明かに他の仕事に對しても適材でないといふことを表白して居ると同樣である。かういふ青年は到底將來の榮達を望むことは出來ない。

吾々の青年時代は、漢學の盛んな時代であり、私も主として漢學を修めたが、その教訓の中に、謙讓の美德といふことがある。私は謙讓といふ事は何時の時代にも必要であると思うて居るが、今日の世の中を見るに、どうも謙讓の德を重んじないやうである。是は獨り青年に限つた事でなく、世間一般の風習がさうである。畢竟是は物質文明の發達に伴ひ、人情が輕薄となり、他人を排しても自分の都合を好くするがよいといふ利己心から出たものに外ならぬと思



澁澤榮一筆蹟

はれる。

自己滿足といふ事は、青年の間に一般に漲つて居る思想であるが、この考からすれば、謙讓乃至謙遜といふことは時代遲れの思想と思考されるであらう。併しながら謙讓は決して時代遲れでもなければ間違つた訓でもない。活社會に立つて融和協調し且他人の信用を得るには、どうしても必要な教訓である。唯、謙讓と卑屈とは動もすれば混同し易いから、よく注意しなくてはならぬ。謙讓とは分り易く言へば、出しやばらぬ事である。早く世に知られたいが爲に、自己宣傳や、自家廣告をする事は謙遜の美德を傷つけるものである。されば、と言つて、必要な場合にも知つて居る事を押し隱して、知らぬ風を裝ふのは、謙讓ではない。是は寧ろ卑屈の部に屬する。平常は決して出しやばらず、自らを持するに謹嚴であつても、必要な場合には自分の信ずる所を明確に發表するの

が眞の謙讓である。

現代の青年は、概して「老人の言ふことは古臭い、時代遲れだ。」と排斥する傾向がある。併し是は大なる間違である。時勢の推移によつて思想も亦遷り變るのは當然であるが、倫理道德は水の流の樣にさう雜作なく動くものではない。私は多年孔子の教を處世の活教訓として遵奉して居るが、何分二千四百年前の教訓であるから、その一言一句が悉く現代に當て嵌まるといふ譯ではないにしても、その根本精神は、人間生活の活教訓とするに足るべき立派な道德である。お互に舊習を墨守し時代に遲れるやうな事は大いに排斥しなければならぬが、されば、と言つて、何でも新しくさへあれば良いといふ樣な間違つた考で、能く嚙みしめて消化する事をせず、これを取入れることは最も愼しまなければならぬ。

それから、現代の青年は動もすれば空想に走り過ぎる傾がある。

理想はよいが、空想に走ることは大いに愼むべき事である。人間に理想がなかつたら、その人間は單に生きんが爲に働いてゐるに過ぎなくなる。それでは人間としての價値がないと言つても誤ではあるまい。殊に青年に理想がなかつたなら、青年としての存在の意義をなさぬ。されば青年が高遠の理想を抱くことは大いに結構なことであるが、一歩を過つて空想の域に入る時は、却つて妨げとなるに至るのである。

總じて青年は元氣の横溢してゐるのを第一の特色とするが、悧巧になり過ぎた現代の青年は、一面に於て空想に走る傾向があると共に、その半面に於ては活氣に乏しいやうである。是は餘りに目先きの事ばかり考へ過ぎてゐる結果であらう。明治維新の大勢を馴致したのは、青年の力であつた。尤も幕末時代と今日とでは、時勢が違つて居るから、同一に論ずる事は出來ぬが、青年の意氣はかくあつて欲しいと思ふ。この意氣がなければ大いに伸びることは出來ぬ。唯くれぐれも注意すべきは空想と理想とを間違へず、遠大の理想を樹てて、是に向つて邁進すべきことである、又茲に注意すべきは、理想と實際とは必ずしも一致するものではないから、若し理想と一致しないやうな事があつても、決して失望落膽することなく、一層の勇氣を奮ひ起して事に當る覺悟がなければならぬ。青年時代は思想の動搖し易い最も危險な時代である。自暴自棄に陷るやうな事があつては一生を誤る事になる。それにつけても平素の修養を積んで居たならば、如何なる場合にもその方針を誤るやうな事はないのであるから、修養は處世の第一の必須條件であることを深く心に銘すべきである。

私は活力の最も旺盛な青年及び壯年の人々に最も望を囑する。總ての仕事は是等の活氣横溢せる、元氣潑剌たる人々が中心とな

つて行ふべきである。されぼと云つて、先輩を無視することは宜しくない。青年者及び壯年者は未來に生きるのであるから、それだけ將來があり、前途洋々たるものであるが、老年者には未來がない、從つて多く過去に生きる。この間に青壯年者との隔たりがあるが、老年者には未來がない代り、幾多の實際の經驗を積んで居る。この實際の經驗といふものは成功と失敗とに拘らず、後進者には生きた教訓であるから、この意味に於て先輩を重んずべきである。又老人であつても、境遇と健康の許す限りは、分相應の働きをなして幾分でも社會公共のために貢獻するのは、人間としての義務である。私自身はこの信條の下に自分の出來るだけの事はして居る積りである。

青年は元氣に任せて時に盲進することがある。それから老人の言ふことは總てが時代遲れであるとなし、多くその意見を尊重しない傾向がある。併し縱ひ思想は古くとも、實際の經驗は机上の名論に勝ること萬々であり、且金錢で購ふことの出來ぬ尊いものであるから、青年諸君も勉めて先輩に接してその意見を敲き、經驗を聞き之を參考資料として能く消化し、仕事をなすに際しても、周到なる用意をなし、先人の失敗の跡を繰返さぬ樣に心掛くべきである。

—青淵先生訓話集—

佐々木信綱
三重縣の人
竹柏園と號す
文學博士
國文學者
歌人
萬葉
萬葉集
日本最古の歌集
二十卷

七　大和の秋

佐々木信綱

空の色も秋になつた。百舌の鳴く聲を聞くにつけても、なつかしまれるのは大和の秋である。すぐにも行つて見たい氣がする。大和は自分の爲には、心のふるさとともいふべき地である。これまで度々遊んだが、秋が最もよい。萬葉を見ても、全體として秋の物をうたつた歌が、春の景物をうたつたのよりも遙に多い。「秋山

秋山われは
冬ごもり春さり來れば鳴かざりし鳥も來鳴きぬ、咲かざりし花も咲けれど、山を茂み入りても取らず、草深み手折りても見ず、秋山の木の葉を見ては、黃葉をば、取りてぞ忍ぶ、青きをば、置きてぞ歎くそこし恨めし秋山我は（卷一）

南圓堂
奈良興福寺金堂の南西にある弘仁四年藤原冬嗣の創建

三笠山

われは」といふ額田女王の歌は、一般の萬葉歌人の感情を言ひ表したものと思ふ。千數百年前の詩人の胸にも秋のあはれが深く響いたのである。

去年の秋は京都滯在中、奈良に行つた。夕暮のしづかな鐘の響を聞きつゝ、奈良ホテルに着いた。洋風の建物ではあるが、さすがに室內の裝飾にも心が用ひてあつて、さばかり奈良の氣分を損はない。食堂で、晩餐を終へた後、月

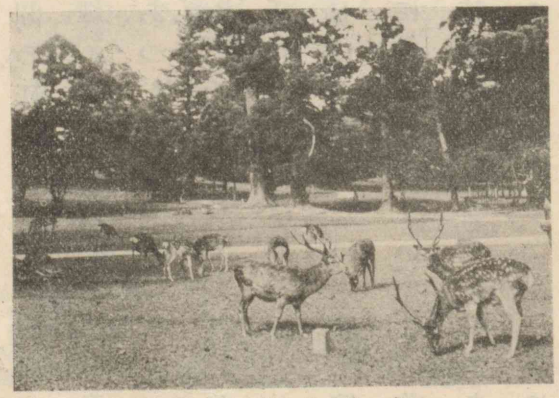
南圓堂

東大寺
奈良市の東にある七大寺の一、聖武天皇の天平勝寶元年に成る

正倉院
大佛殿の北に在る

夜の公園をめぐつた。胸にしむ冷たい光を身に浴びつつ、ほの暗い老木の杉の木蔭にたゝずんで居る鹿に驚かされたことも幾度かであつた。東大寺の横を通つて、知足院の院主を訪うた。院は正倉院の眞裏なる高い岡の上にある。幾十階の石磴を登つて門前から振りかへつて見ると、奈良の町の燈火は朧に浮いてゐる。夜更けての歸るさに、雪消の澤のほとりで鹿の鳴くのを聞いた。

霧のこめた曙の心地よさ　春日山はこゝかしこ紅に染つてゐる。今は小さな流となつた佐保川を渡つて、聖武天皇の佐保山の御陵に赴いた。萬葉集中の雄大なる御製に、また典雅なる御筆の跡に、今もまさや

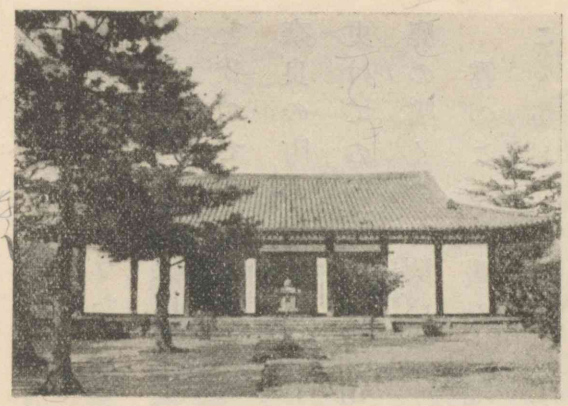

奈良公園の鹿

新藥師寺
奈良市高畠井之上町に在る東大寺の末寺

人麿
柿本人麿
萬葉集時代の歌人

憶良
山上憶良
萬葉集時代の歌人

かに御爲人の偲ばれる奈良大帝の御上を偲んで、ぬかづいてゐる折しも、時雨がさと降つて來た。やがて晴れて日が照り渡つた。



新藥師寺

春日山の木の間の紅葉、道の邊の櫻紅葉が雨にぬれて輝いてゐる美しさは、目覺むるばかりであつた。新藥師寺へゆくついぢ道で、また時雨が追つて來た。萬葉人の昔から千年の年月は早く過ぎた。しかも、この春日山のすがたは、人麿も憶良も眺めた趣にはかはるまい。この美しいやさしい時雨の雨もまた彼等があつた昔ながらの雨であらう。萬葉集には時雨の歌が多い。自分は奈良に住む事が出來ぬのをなさけなく思つた。

—萬葉漫筆—

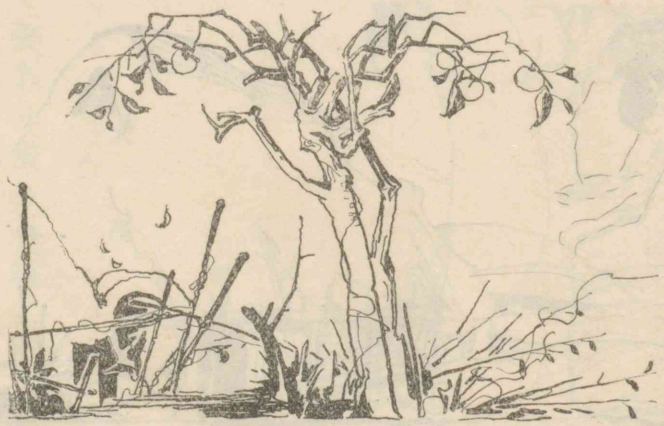
名は虎壽
茨城縣の人
詩人

八 秋深し

煤垂りし簀子の上に、
三毛の雄の仔猫生まれて、
家舊りし古き籬を、
幾返り雨は打つらん。

井の中に栗の落ちぬと
竹持ちて弟騷げど、
木より散るしづく佗びつゝ
芋洗ふ姉は走らず。

秋は今半ばなりけり。

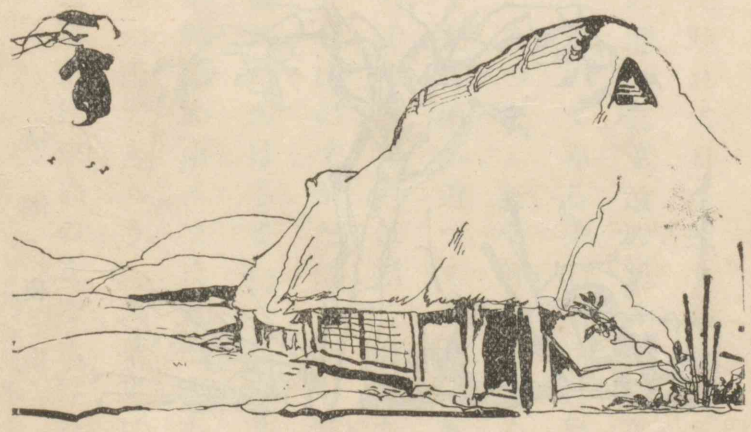


横瀨夜雨

澁柿の紅き葉隱れ、
大蜻蛉飛ぶに勞れて
牛部屋の羽目に憩へり。

日暮るれば森に百舌鳴き、
夜明くれば田に鳴飛ぶと、
草の中に蠶(はが)撥は張れども、
雨に濡れて蠶(ふら)のみ流る。

蕎麥の花白き畑にも、
山遠き落穗の田にも
生ける案山子、生ける人なく
一村は雨に浸れり。



大西祝
號は操山
哲學者
文學博士
明治三十三年歿
(年三十六)

秋は今半ばなりけり、
厩戸の馬も肥えたり、
蓑も腐れ笠も破れよ、
堰の戸に水は滿つらん。

七つ星隱せる雲に
曉の光迷へり、
石に當てゝ鎌を磨けば
石の上に雨は注ぎて。

九 俚諺

羅馬の一詩人が警句(エピグラム)を蜜蜂に譬へて「螫あり、蜜あり、軀は小さし」と云へるは、すべての俚諺にとは謂ひ難きも、その最も巧妙なるも

—雪燈籠—

のには適當の語なるべし。俚諺の上乘なるものは多くはこの三者を具ふ。言短くして意義味ふべく、寸鐵人を殺すの妙あり。

人口に膾炙し易からむことを求むる故に、俚諺はおのづから律語をなす傾あり。我が國語にては、五又は七が自らなる律呂なれば我が國の俚諺にはこの律に從へるもの甚だ多し。

雉子も鳴かずば撃たれまい。

心の鬼が身を責める。

などいふごとく、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはいと多し。

人と屏風はすぐには立たぬ。

思ふ念力、岩をもとほす。

身を捨てゝこそ浮む瀬もあれ。

などは七七の調子を成して語路頗るよし。

十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。

といふも、七七、七五の律あり。また同じ理由により同音または同語を重ねたる類のものも多し。例へば、

多勢に無勢。

短氣は損氣。

弱り目に祟り目。

處かはれば品かはる。

藥九層倍。

勝つて兜の緒をしめよ。

といふが如し。

かく律を成し、尾韻又は頭韻を用ひること詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少く、多くは具體的に言ひなして感動の強からむことを求め、又これが爲に屢誇張の言を喜ぶこと

も亦その詩歌に似たる點なり。この故に、諺にて物の度量を言ふには、その數又は量を定めて言ふを好む。

七たびさがして人を疑へ。

人の噂も七十五日。

預り物は半分の主。

などの類、數ふるに遑あらず。數の中にても最も好んで用ひるは三の數なるべし。

三度目が定の目。

三年たてば三つになる。

懺悔話をすれば三年の罪が滅びる。

三人よれば文珠の智慧。

朝起は三文の徳、

その他なほ多かるべし。又

用心は臆病にせよ。

黒犬にくはれて灰の和滓(たれかす)におそれる。

などは誇張に因りてその意味を成せるものゝ例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見まことしからぬ語句、即ちパラドックスを用ひるを喜ぶ。この種の諺に深く味ふべきもの少からず。

急がばまはれ。

言はぬは言ふに勝る。

逢ふは別れのはじめ。

兄弟は他人のはじまり。

論語讀みの論語知らず。

人を使ふは使はれる。

などその例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に却つて相

通ずる所あるを發見するは深邃なる智慧の一特徴なり。

パラドックスのみに限らず、總べて反對のものを相並ぶるは、吾人の注意を捉ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。

骨折損の草臥儲け。

聞いて極樂、見て地獄。

訊くは一旦の恥、訊かぬは一生の恥。

長者の萬燈より貧者の一燈。

反對を並ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相並べて、そを比照するは俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喩に富める所以にして、その比喩の極めて巧妙なる、詩人の作としても恥かしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは、多くこの類にあり。今思ひ出づるに從うて、その三四の例を擧げむか。

馬には乘つて見よ、人には添つて見よ。

名は淳介
岡山縣の人
詩人

後西天皇

旅は道づれ世はなさけ。

といふ如きは、幾たび誦するもその趣味の津々たるを覺ゆ。

花は櫻木、人は武士。

これ、以て我が國民の理想を誇るに足るものゝ一なるべし。

佛法と藁屋の雨は出でゝ聞け。

風流の心に富める國民ならで、誰か能く之を言はむ。之を口ずさみ見よ。如何に詩心・道心・宗教心の相結びてなせる高雅・幽玄なる妙趣の浮び來るぞ。

一〇　名器を毀つ

薄田泣菫

勸修寺大納言經廣は、心ざまが眞直で、誰に遠慮もなく物の言へる人だつた。

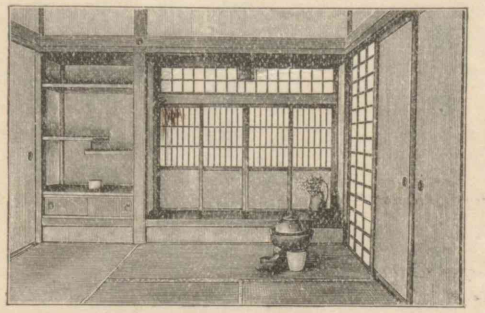
時の禁裏、後西天皇は茶の湯を好ませられ、茶人に共通の道具癖

から、井戸といふ茶碗の名器を御手に入れて、この上もなく珍重せられてゐた。

あるとき經廣が御前にまかり出づると、主上はとりわけ上御機嫌で、御自分で御祕藏の井戸をお取出しになつてお茶を賜はつた。經廣は主上の御口からその茶碗が名高い井戸だといふことを承ると、驚きと喜びとに思はず聲をはずませた。

「井戸と申しますと、名前のみはかねて聞き及びましたが、眼にいたすのはまつたく始めてのことでございます。つきましては御許しを蒙つて、篤と拜見いたしたいと存じますが……」

主上からお許しが出ると、經廣はいそ〳〵と立ち上つて南向き



茶室（銀閣寺東求堂）

の勾欄に近づいて往つた。丁度秋の曇り日の午過ぎだつたので、御殿の中は經廣の老眼にはあまりに薄暗かつた。彼は明りを求めて勾欄の上にのしかゝるやうにして茶碗を眺めた。如何にも感に堪へたやうに幾度か掌面にひねくり廻してゐるうちに、どうしたはずみにか、つい御器を取り落すやうな粗忽をしでかした。茶碗は切石の上に落ちて、粉々に碎けてしまつた。

主上はさつと御顏色を變へさせられたらしかつた。座に歸つて來た經廣には、惡びれた氣色も見えなかつた。

「過失とは申しながら、御祕藏の名器を毀ちました罪は重々恐れ入ります。しかし、よく〳〵考へまするに、名器とは言ひ條、これまで數多の人の手にかゝりたるやも知れざる品、むかし宋の徽宗皇帝は祕藏の名硯を、米元章に御貸與へになり、一度臣下の手に觸れたものは、また用ひ難いとあつて、そのまゝ元章にお下げになりま

したとやら。さやうな嫌ひのある品を御側近うお置きになりますのはいかがかと存ぜられます。してみますれば、唯今の粗忽も却つて怪我の功名かと存じまして……」

この一言を聞かせられると、主上の御機嫌は直つたが、しかし何となくお寂しさうであつた、

心ざまの眞直な經廣は、茶器の愛に溺れきつていらせられた主上をお諫め申さうとして、向ふ見ずにもまづ肝腎の茶器を壞してしまつたのである。

伊達政宗があるとき家に傳へた名物茶碗を取出してゐたことがあつた。

太閤秀吉が自分の好みから、また政略上の方便から煽り立てた茶の湯の流行は、激情と反抗心との持主であつた奥州の荒くれ男

をも捉へて、利休の門に弟子入をさせ、時をりはせう事なさの退屈しのぎから、茶器弄りをさへさせるやうになつた。

茶碗は天目だつた。紺青色の釉のなかに、寶玉のやうな九曜星の美しい花紋が、茶碗の肌一面に光つてゐた。政宗は持前の片眼に磨りつけるやうにして、茶碗を貪り眺めてゐたが、ついうつとりとなつたまゝ、危く茶碗を掌面から取落さうとした。

伊達政宗

政宗ははつとして覺えず膽を潰した。

「金二千兩もしたものぢや。壞してなるものか。」

こんな考が電光のやうに頭のなかを走つた。仕合せと茶碗は膝の上で巧く兩手の掌面に抱きとめられてゐた。政宗は冷汗を

かいた。胸には高く動悸が打つてゐた。

「おれは娘のやうに魂消たな。――恥づかしいことぢや。」

政宗はその次の瞬間さう思つて悔しさに身悶えした。咄嗟の場合器の値段を思ひ浮べて、胸をどきつとさせたのが何としても堪へられなく厭だつた。

いつだつたか、政宗は徳川家康に茶の饗應を受けたことがあつた。そのをり家康は湯を汲出さうとして何心なく釜の蓋へ手をやつた。蓋は火のやうに熱してゐた。あまりの熱さに家康は小兒のやうに、

「おう、熱う……」

と叫んで、釜の蓋を取り離したかと思ふと、慌ててその手を自分の耳朶へやつた。その樣子がいかにも可笑しかつたので、政宗は覺

「うふ……」

と噴き出してしまつた。

家康はそれを聞くと、また氣をとり直して、前よりは熱してゐたらしい釜の蓋を平氣で撮み上げた。そして何事もなかつたやうに靜かに茶を立てにかゝつた。

徳川家康

政宗はいつに變らぬ亭主のねばり强さに感心させられたが、それでも腹の中ではもしか俺だつたら、初めに手に取上げたが最後、どんなに熱くても釜の蓋を取り落す樣なことはしまいと思つた。

政宗は今それを思ひ出した。嘗て思上りをしたものが、今の有

後醍醐天皇

（大德寺所藏）

様はどうしたものだと思ふと、顔から火が出るやうな氣持がした。誰だつたか知らないが、自分の耳近くにやつて來て、

「うふ……」

と冷かすやうに噴き出したらしい氣配を政宗は感じた。

逆上せ易いこの茶人は、かつとなつてしまつた。彼は鷲摑みに茶碗を片手にひつ摑んだかと思ふと、いきなりそれを庭石目がけて叩きつけた。茶碗はけたゝましい音を立てて、粉微塵に碎け散つた。

「は、は、は、は……」

政宗は聲高く笑つた。彼はその瞬間、金二千兩の天目茶碗を失つた代りに、自分の心の落着きをしかと取り返すことが出來たやうに思つて、昂然と胸を反らせた。

―艸木蟲魚―

主上　後醍醐天皇

藤房・季房　共に宣房の子

赤坂の城　河内國南河内郡赤坂村楠木正成の築いたもの

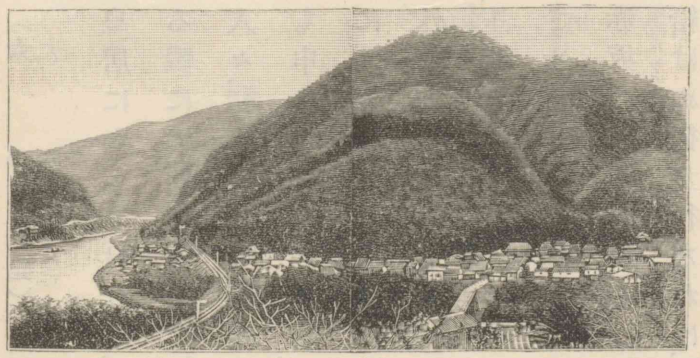
一一　松の下露

（太平記）

さるほどに類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々・卿相・雲客・徒跣なる體にて、何所を指すともなく、足にまかせて落ち行き給ふ。この人々、初め一二町がほどこそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第に別別になつて、後にはただ藤房・季房二人より外は、主上の御手を引きまゐらする人もなし。　忝くも十善の天子、玉體を田夫・野人の形に變へさせ給ひて、そこともも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有樣こそあさましけれ。　いかにもして夜の中に赤坂の城へと御心ばかりをつくされけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して一足には休み、二足には立ちどまり、晝は道

のそばなる青塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草のおろそかなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて羅穀の御袖をほしあへず。とかくして、夜晝三日に山城の多賀郷なる有王山の麓まで、落ちさせ給ひてけり。

藤房季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れて、今はいかなる目に逢ふとも、逃れぬべき心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣・兄弟諸共に、現の夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞し召して、木蔭に立寄らせ給ひたれば、下露のはらはらと御袖にかかりけるを、主上御覽ぜられて、



笠置山

さして行く笠置の山を出でしより
あめが下には隠れがもなし

藤房卿御涙をおさへて

いかにせん頼むかげとて立寄れば
なほ袖ぬらす松のしたつゆ

藤原藤房（小堀鞆音筆）

山城の國の住人深須入道・松井藏人二人は、この邊の案内者なりければ、山々峰々殘る所なく搜しける間、皇居隠れなく尋ね出されさせ給ふ。主上誠に恐ろしげなる御氣色にて、汝等心あるものならば、天恩を戴いて私の榮華を期

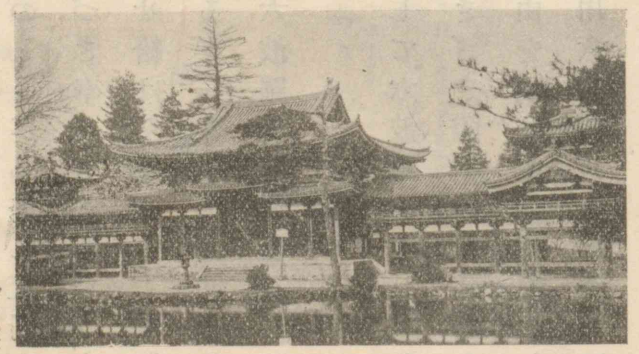
南都　奈良
殷湯　殷の湯王
越王　勾踐を指す
會稽　中華民國浙江省紹興府城の東南にある會稽山

せよ。」と仰せられければ、さしもの深須入道俄かに心變じて、「あはれこの君を隱し奉つて義兵を擧げばや。」と思ひけれども、後に續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして、道の成り難からんことをはばかつて、もだしけるこそうたてけれ。　俄かの事にて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乘せまゐらせて、まづ南都の內山へ入れ奉る。　その體ただ殷湯、夏臺に囚はれ、越王、會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。　これを聞きこれを見る人毎に、袖を濡さずといふことなかりけり。

この時、こゝかしこにて生捕られ給ひける人々都合六十一人、その所從・眷屬どもに至るまでは數ふるに遑あらず。　或は籠輿に召させられ、或は傳馬に乘せられて、白晝に京都に入り給ひければ、その方ざまかと覺えたる男女、ちまたに立並んで、人目をも憚らず泣き悲しむ。　あさましかりし有樣なり。

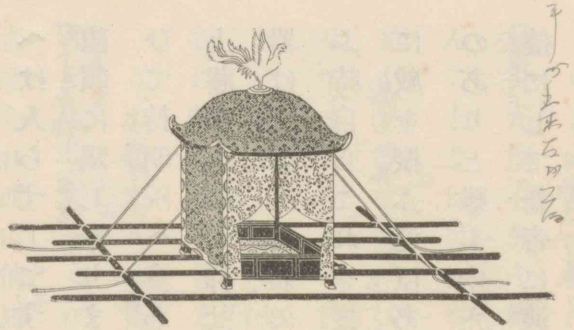
兩大將　大佛貞直　金澤貞將

十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞、三千餘騎にて路を警護仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。　その日、關東の兩大將京へは入らずして、すぐに宇治へ參り向つて龍顏に謁し奉り、まづ三種の神器を渡し給ひて、持明院へ參らすべき由を奏聞す。　主上、藤房を以て仰せ出されけるは、三種の神器は古より繼體の君位を天に受けさせ給ふ時、自らこれを授け奉るものなり。　四海に威を振ふ逆臣あつて、暫く天下を握るものありと雖も、未だこの三種の重器を自ら擅にして、新帝に渡し奉る例を聞かず。　その上、內侍所をば笠置の本堂に棄ておき奉りしかば、定めて戰場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。　神璽は


平等院（鳳凰堂）

山路に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも我が國の守とならせ給はぬことあらじ。寶劍は武家のともがら若し天罰を顧みずして玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させ給はん爲に、暫くも御身を放たるゝことあるまじきなり。」と仰せられければ、東使兩人も六波羅も言葉なくして退出す。

翌日に龍駕を廻らして六波羅へ成しまゐらせんとしけるを、さきざき臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を強ひて仰せ出されける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に御逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸にことかはりて、鳳輩は數萬の武士にうち圍まれ、



鳳輦

河原
賀茂の河原

岡本綺堂
名は敬二
東京の人
戲曲家
修善寺村
靜岡縣田方郡修善寺村

月卿雲客は怪しげなる籠輿・傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ河原を上りて、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。

悲しいかな、昨日は紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の裝をつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の嚴しきに御心を惱ませらる。時移り事去り、樂しみ盡きて悲しみ來る。天上の五衰人間の一炊、ただ夢かとのみぞ覺えたる。

一二 夜叉王

岡本綺堂

元久元年七月十八日。

伊豆の國狩野の莊、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に

紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、その後は畠を隔てゝ、塔の峯つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる暖簾を下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

楓、門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿(廿三歳)、後より下田五郎景安(十七八歳)頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵、將軍家の御微行ぢや、疎相があつてはなりませんぞ。

楓　はつと平伏す。頼家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉　思ひも寄らぬお成とて、何の設けもござりませぬが、先づあれへお通り下されませ。

頼家は緣に腰を掛く。

夜叉　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に遺さんと、曩に其の方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿まで遣はして置いたるに、日を經れども出來せず。幾度か延引を申立てゝ、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎　たかゞ面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰付けられしは當春の初、その後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠、最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散々ぢやぞ。

頼家　予は生まれ附いての性急ぢや。何時まで待てど暮らせど埒明かず。餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉　御立腹恐入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍

源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一箇もなく、更に打替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

頼家　えゝ、催促の都度に同じ事を……その申譯は聞き飽いたぞ。

五郎　この上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉　その期日は申上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に槌を持てば、面は容易く成るものと思召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生なき粗木を削り、男・女・天人・夜叉・羅刹、ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打込む面作師。五體に漲る精力が兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流るゝ如く彼に通ひて、

三島神社
靜岡縣田方郡三島町にある社

始めて面を作られまする。但しその時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、我ながら確とはわかりませぬ。

僧　これ〳〵、夜叉王殿。上樣は御自身も仰せらるゝ如く、至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらくりくらりと取止の無い事申上げたら、御疳癖が愈募らう程にこなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからう。

頼家

夜叉　ぢやというて出來ぬものはのう。

僧　何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京・鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王と

いへば、人にも少しは知られた者、たとひお咎め受けようとも、己が心に染まぬ細工を世に遺すのは、如何にも無念ぢや。

賴家　何、無念ぢやと……。さらば如何なる祟を受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉　恐れながら、早急には……。

賴家　んゝ、おのれ覺悟せい。

癇癖募れる賴家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや拔かんとす。奥より桂走り出で、

桂　まあ〳〵お待ち下さりませ。

賴家　えゝ、退け〳〵。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は唯今獻上いたしまする。のう父樣。

と顧みれども、夜叉王は默して答へず。

五郎　何、面は既に出來して居るか。

賴家　えゝおのれ、前後不揃の事を申立てゝ予を欺かうでな。

桂　いえ〳〵嘘僞りではござりませぬ。面は確かに出來して居りまする。これ父樣、もうこの上は是非がござんすまい。

楓　ほんにさうぢや。昨夜漸く出來したといふ彼の面を、いつそ獻上なされては……。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上樣に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、その面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、早う。

楓　あい〳〵。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取りて頼家の前に捧ぐ。頼家無言にて心少しく解けたる體なり。

桂　僞ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲を擧げる。

頼家　おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上樣おん顏に生寫しぢや。

頼家　んゝ。

と飽かず打ちまもる。

僧　されば、こそいはぬ事か。これ程の物が出來してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。ははは。

夜叉王形を改める。

夜叉　何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、かう相成つては致方もござりませぬ。方々にはその面を何と御覽なされまする。

頼家　さすがは夜叉王、天晴のものぢや。頼家も滿足したぞ。

夜叉　天晴との御賞美は憚ながらおめがね違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎　面が死んで居るとは……。

夜叉　年來數多打つたる面は生けるが如しと人も言ひ、我も許して居りましたが、不思議や、この度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色無く、魂も無き死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎　そちはさやうに申しても、我等の眼にはやはり生きたる人の

面……。死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉　いや〳〵、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き怨靈・怪異なんどの類……。

僧　あ、これ〳〵、そのやうな不吉な事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊。あり難く御禮を申されい。

頼家　んゝ、とにかくにも、この面は頼家の意に適うた。持ち歸るぞ。

夜叉　たつて御所望とござりますれば……。

頼家　おゝ所望ぢや。それ。

頤にて示せば、桂は心得て假面を箱に納め、頼家に捧ぐ。頼家立つ、五郎も立つ。桂庭におりて立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。

頼家行きかゝりて物に躓く。

頼家　おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧は進み出でて桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧に渡し燈籠を持ちて出づ。夜叉王はじつと思案の體なり。

楓　父様、お見送を……。

夜叉王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

頼家　そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

頼家等相前後して出で行く。

夜叉王起ち上つて、暫時默然としてゐたりしが、やがてつか〳〵と緣に上り、細工場より槌を持來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓は驚きて取縋る。

夜叉王（劇）

楓　あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉　せつぱ詰りて是非に及ばず、拙き細工を獻上したは悔んでも返らぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡つて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑を遺さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り。再び槌は持つまいぞ。

楓　さりとは短氣でござりませう。如何なる名人・上手でも、細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でも天晴名作が出來ようならば、それが卽ち名人ではござりませぬか。

夜叉　んゝ。

楓　拙い細工を世に出したが、さ程無念と思召さば、これから愈精出して世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

中西悟堂
金澤市の人
詩人

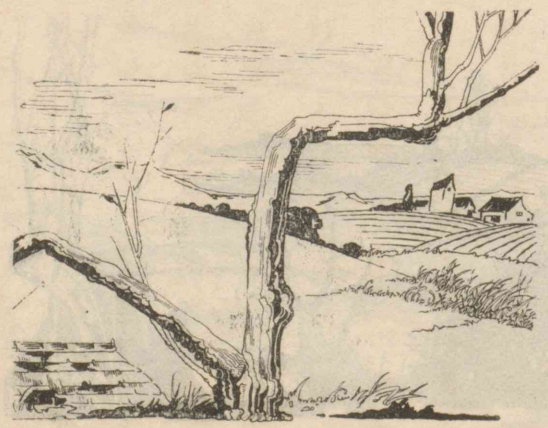
楓は縋りて泣く。夜叉王答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。（日暮れて笛の音遠く聞ゆ。）

—綺堂戯曲集—

一三　夕靄の野

中西悟堂

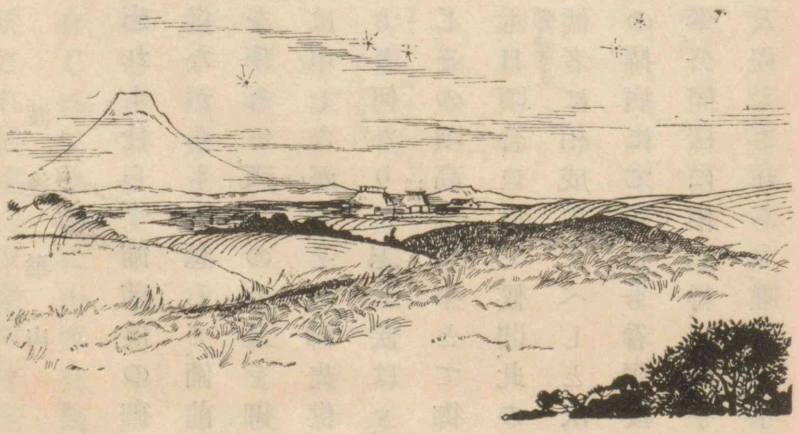
野にはもう夕靄が流れ始めた。
あちこちの枯木立の梢は、
夕日の殘光に染められ、
靜けさと平和とに領せられた
麥畑には、
默つて農夫が働いてゐる。
その敬虔な勞働の姿よ。
時々鍬が白く光るが、
靄はもう彼等を包みながら、



青麥の上を、
生き物のやうに這ひ廻る。

畑の路を、
笊を抱へた娘が、
家路の方へと歸つて行く。
笊に盛られた京菜の新鮮な綠、
そして、頰冠の下に見える娘の顏の
單純な健康な笑よ。
娘は畑を拔けて
木立の道を、
夕餉の煙吐く垣根の方へ、
跣足(はだし)のまゝ急いで行く。

神の言葉に充ちた
平和な野よ。
ここには愛と許との外の
何物もない。
地平線には、
墨繪のやうな富士が
風に吹かれてゐて、
その上に、
夕の星が出現した。
農夫達がそれに對つて、
一日の恙ない勞働を感謝し、
明日の幸福を祈るところの
慈悲ある星が出現した。



渡邊崋山
名は登
世家
三河國田原藩の士
天保十二年歿
（年四十九）

爽鳩先生
鷹見氏
田原藩の儒臣

一四　わが生ひ立

渡邊崋山

私十二歳の時、日本橋通を通行仕候節、忘れも仕らず備前侯の御先供に當り、打擲を受け申候。當時子供ながらも大息して、備前侯は御歳大抵私と同年位なるに、大衆を率ゐて天下の大道を御横行成され、私は同じ人間にて、天分とは申しながら、その御先供に當りて打たるゝ事發憤に堪へず、今より何なりと志し候はゞ、如何なる儀にても出來申すべしと存じ、その頃高橋文平とて御祐筆相勤め申候者、私子供には候へども、日頃合口にて候間、此の者に相談に及び、爽鳩先生の門に入り、儒者に相成申すべしと決心仕候。さりながら私親父二十年來の持病にて、一日も看病・按摩を缺き難く候間、朝夕退食の間、之を奉公同樣に相心得、母の手助け仕候。その上兄弟皆幼少にて七人程もこれあり、唯母の手

板橋
東京市板橋區板橋町

熊谷宿
埼玉縣大里郡熊谷町

青松寺
東京市芝公園内

一つにて老祖・病父・私共までその日を送り候事故、何分些かの餘裕も之なく候。貧窮最も甚だしく、筆紙に盡し候所には之なく候。之に依つて弟共は寺に奉公に出し、又は出家致させ、妹は御旗本へ奉公に遣はし申候。

私十四歳許の冬、幼少の弟を板橋迄生別れに送り參り候時、ちらちら降來る雪の中を、八九歳の弟が見も知らぬ荒男に連れられ、後を振向き〳〵別れ候事、今に目前に髣髴仕候。右弟は定意と申し、後熊谷宿にて客死仕候。雷之助と申すは、始め七歳の時青松寺と申す寺へ奉公に遣はし、後、御旗本屋敷へ養子に遣はし候。是以て食物足らず、困窮の餘りの事に候へば、養子とは申しながら丸裸にて、申さば親不知の樣にて遣はし申候仕合せ故、何事に就きても先方里方を侮り候を心外に存じ、終に京都に出奔仕候。その後主人惜しき人物に存ぜられ、引戻され候處、是又數年辛苦

仕候爲、彼の地にて病氣に罷成、歸府後、間も無く終に相果て申候。右の次第故、妹兩人も、一人は遠方へ遣はし、一人は貧家へ罷越し、貧死仕候。これかれを考へ候へば、至貧至困無策無術の上に親父大病に相罹り候爲、かくは兄弟過半非業同様の病死仕候次第に御座候。これにて當時困難至極の儀御察し下さるべく候。

渡邊崋山（椿椿山筆）

私母近來迄夜中寢ね候に、蒲團と申すもの、夜具と申すもの、引きかけ候を見及び申さず、破れ疊の上にごろ寢仕り、冬は炬燵にふせり申候。私親父大病故、高料の藥種・藥禮・日食の麵類等に事缺き、疊・建具の外大抵質物に置盡し、猶親類共にも借盡し候

本所一つ目　今の本所區千歳町

白芝山　白川氏　名は景皓

金陵　金子氏　江戸の書家　文化十四年歿

へば、僅か南鎭一片の儀にて、母方身内に當り候山伏の本所一つ目に住居候方へ、母事唯今存生仕居候助右衞門と申す弟を背負ひ、雪中を冒して罷越し夜に入り候て歸宅仕候事之あり候。その節、私洗足の湯を沸し候とて衣服をこがし、大いに叱られ候儀今に覺え罷在候。之に依つて、猶又高橋文平に相談仕候處、とても學問など致し、儒者に相成候とて、金のとれ候儀は之なく、何よりも貧を救ふ道第一なりと申すにより、爽鳩先生を賴み、芝の白芝山と申す畫工へ入門仕候。この時私十六歳に御座候。然る處貧人にて附屆行屆かずとて、僅か二年にて、師家より斷りを受け申候。私もこの時は如何仕るべきかと泣き沈み候處、親父申候は、金陵事は大森勇三郎樣の御家來に付、その旨申したらば憐み申すべしと申すにより、弟子と相成候處、金陵殊の外相憐み、少少は出來候樣に相成候。さりながら、半紙を調へ候手段之なく

文晁
谷氏
江戸の畫家
天保十二年歿

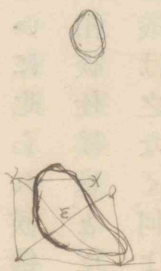
一齋
佐藤氏
德川幕府の儒官
安政六年歿

候まゝ、初午燈籠の畫を作り、百枚にて一貫の錢を取り、日本橋二丁目遠江屋、麹町天神たこやにて憐みを乞ひ、多分に相成候へば、右を以て紙筆を調へ申候。かく仕候間にも學問は仕度存じ候へども、何分閑暇之なく候へば、冬に相成候へば、朝七つ時に起出で、飯を焚き、その焚火にて讀書仕候。右は私を憐み畫道に於て種々取立てくれ候文晁が、毎曉起出で畫を認め候咄を承りて、發憤致候次第に御座候。右畫事少々宛内職と相成、稽古も出來候樣相成候も、全く前爽鳩先生の恩澤に御座候。

私廿六歳の正月元日、深く感ずる所これあり

見よや春、大地もとほす地蟲さへ

と申す句仕候。之に依つて一齋へも申談じ、學問仕度候へども、何分寸暇なく候へば、夜中にても參り申すべきに付、御門制の儀然るべく御取成下され候樣依賴候處、一齋よりその趣を書取り



親父へ申遣はされ候趣之あり、即ち親父より村松六郎左衞門殿へ夜御門限の儀につき願ひ出で候處、六郎左衞門殿より、儒者に之なくては御門制の儀仰出され難き旨御沙汰を傳へられ候に付、終に折角の志相挫け申候。

水禽圖　（渡邊崋山筆）

熟存じ候は上にして君に忠、下にして親に孝、皆是學問中より出で來り候儀に之あり、殊に上へ忠と申す事は無學無術にては叶ひ難し、これよりは愈以て繪事を專らとして、急にしては親の貧を助け、緩にしては天下第一の畫工と相成申すべき一事に思ひ定め申候。

繪事にて推測り存じ候に、第一の心と申すもの立ち申さず候ては、物の形整ひ、落なく見事には出來申さず候。　また心ばかりやたけに存じ込候とて、手が心の通り動き申さず候ては、畫成り申さず候。　また手ばかり自由に相成候とも、胴體四肢治り申さず候ては、机に向ひ、腹より溢れ候樣には出來申さず候。　之に依つて總身の中、髮の先、爪の端まで皆畫に相成候樣仕る事にて候。已に古人も「明窓淨几は書の合、風雨擾雜は書の乖。」と申候。　身外のものすら此の如し。　況して總身のうち猶更に御座候。　今の諸侯如何にや。　諸侯にして國を治めずして家中・百姓に出精致せと令し候とて服從仕る者之あるべく哉。　又奉行にても奉行だけの事を盡し申さずして百姓に令し候うても、猶更承知仕らず候。　然らば上よりして下足輕に至る迄、治安に志これなくては出來申さゞる如く、繪事も右の通りと相心得候へども治道の事は如何哉、審かに辨へ申さず候。　左樣に御座候へば、畫事も治道も一理にして二理はこれなく、畫道を以て治道に試み申すべしとあらんには、隨分試み申すべく候

—華山全集—

芥川龍之介
東京の人
文學者
昭和二年歿（年三十六）

一五　蜜柑

芥川龍之介

或曇つた冬の日暮である。　私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下ろして、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。　とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乘客はゐなかつた。外を覗くと、薄暗いプラットフォームにも、今日は珍らしく見送りの人影さへ跡を絕つて、唯檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しさうに吠え立ててゐた。　これ等はその時の私の心もちと、不思議な位似つかはしい景色だつた。　私の頭の中には云ひやうのない疲勞と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりした影を落し

てゐた。私は外套のポッケトへぢつと兩手をつつこんだ儘、そこにはいつてゐる夕刊を出して見ようといふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずる〳〵と後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまへてゐた。所がそれよりも先にけたゝましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か云ひ罵る聲と共に、私の乘つてゐる二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはいつて來た。と、同時に一つづしりと搖れて、徐ろに汽車は動き出した。

小娘は油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある皹(ひび)だらけの兩頬を氣持の惡い程赤くほてらせた、如何に

も田舍者らしい娘だつた。しかも垢じみた萠黄色の毛絲の襟卷がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包があつた。その又包を抱へた霜燒けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顏だちを好まなかつた。それから彼女の服裝が不潔なのもやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから卷煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云ふ心もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやうな心持がして、思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の小娘が、向ふ側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしてゐるが、重い硝子戸は中々思ふやうにあがらないらしい。皹だらけの

頬は愈〻赤くなつて、時々鼻洟をすゝりこむ音が、小さな息の切れる聲と一しよに、せはしなく耳へはいつて來る。これは勿論私にも幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかゝらうとしてゐる事は暮色の中に枯草ばかり明るい兩側の山腹が、間近く窓側に迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事であつた。にも係らず、この小娘は、わざ〳〵しめてある窓の戸を下ろさうとする。その理由が私には呑みこめなかつた。いやそれが私には、單にこの小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから私は腹の底に依然として險しい感情を蓄へながら、あの霜燒けの手が硝子戸を下ろさうとして惡戰苦闘する樣子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の明けようとした硝

子戸は、とう〳〵ばたりと下へ落ちた。さうしてその四角な穴の中から、煤を溶かしたやうなどす黑い空氣が、俄に息苦しい煙になつて濛々と車内へ漲り出した。元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顔に當てる暇さへなく、この煙を滿面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつけない程咳きこまなければならなかつた。が、小娘は私に頓着する氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戰がせながら、ぢつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る〳〵明るくなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで來なかつたなら、漸く咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

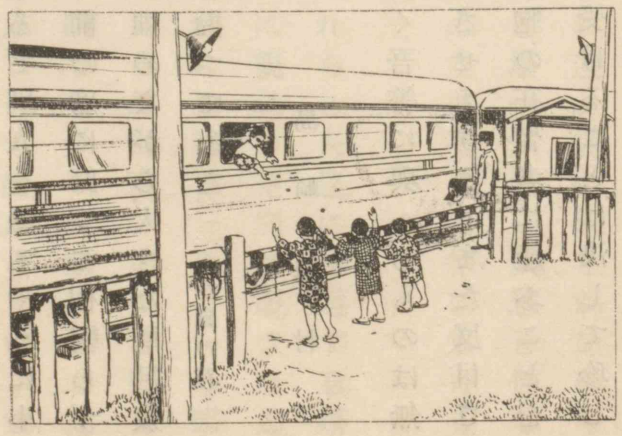
しかし、汽車はその時分には、もうやす〳〵と隧道を辷りぬけて、

枯草の山と山との間に挾まれた、或貧しい町はづれの踏切りに通りかゝつてゐた。踏切りの近くには、いづれも見すぼらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狹苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであらう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を搖つてゐた。やつと隧道を出たと思ふ――その時その蕭索とした踏切りの柵の向うに、私は頰の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。彼等は皆この曇天に押しすくめられたかと思ふ程、揃つて背が低かつた。さうして又この町はづれの陰慘たる風物と同じ樣な色の着物を着てゐた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に手を揚げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊聲を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である、窓から半身を乘り出してゐた例の娘が、あの霜燒けの手をつとのばして、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすば

かり暖な日の色に染まつてゐる蜜柑が、凡そ五つ六つ汽車を見送つた子供たちの上へ、ばらばらと空から降つて來た。私は思はず息を呑んだ。さうして刹那に一切を了解した。

小娘は――恐らくはこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、その懷に藏してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに來た弟たちの勞に報いたのである。

暮色を帶びた町はづれの踏切りと、小鳥のやうに聲を揚げた三人の子供たちと、さうしてその上に亂落する鮮かな蜜柑の色と――すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、



せつない程はつきりと、この光景が燒きつけられた。さうしてそこからあるえたいの知れない朗かな心もちが湧き上つてくるのを意識した。私は昂然と頭を擧げて、まるで別人を見るやうに小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に歸つて、相變らず輝だらけの頰を萠黃色の毛絲の襟卷に埋めながら、大きな風呂敷包を抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐた。　—沙羅の花—

島崎藤村
名は春樹
長野縣の人
文學者

一六　故國に歸りて

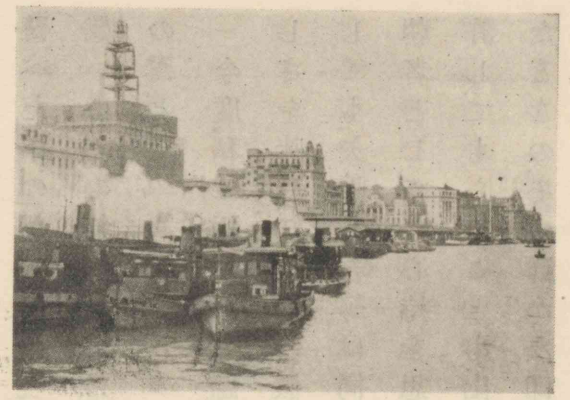
島崎藤村

異鄕の旅ほど民族としての意識を強く吾等に與へるものは無い。その結果は、海外在留の同胞を接近させもするし、また反目させもする。外國を旅して見ると、他の同胞の在留者に逢ふことを非常に厭がつて居るやうな日本人を見受けることは決して珍しくない。曾て私は巴里の客舍で嘆息したことがある。吾等海外の旅行者は直ぐ懇意にもなれるかはりに、直ぐまた離れて了はねばならないやうな事情の下にある。あの遠い雲の往きかひにも譬へたいのが吾々の境涯だ。同胞の愛と、堪へがたい旅愁と、信じ難いほどの無刺戟とは、實に吾等を十年の友のやうに結び着けるのだと。

今度、私は國の方へ歸つて來て、再びそれらの人達に邂逅する嬉しさを味ひ知つた。假令異鄕での交りに親疎の差別はあつたとしても、矢張り吾等は同じ旅の記憶に繫がれて居る。そこから歸朝者としての心持を思ひやつてもらふことが出來、一切の言行を許してもらふことも出來、歐羅巴を見た眼でもう一度亞細亞を見たときの、その鮮かな印象を互に比べ合ふことも出來るといふ氣がする。

例へば私が今度の船旅を語るとしよう。今日東洋の諸港に移

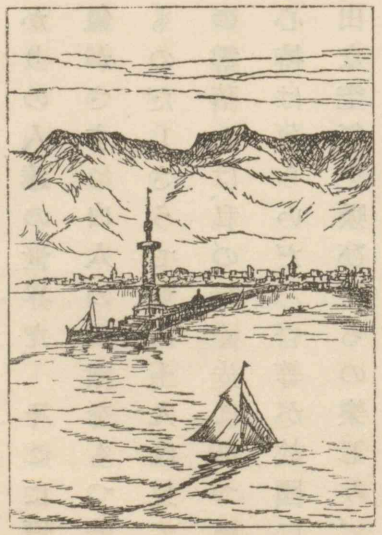
住しつゝある日本人は新嘉坡に凡そ三千人、香港に凡そ千五百人、上海に凡そ一萬四五千人を數へる程の盛況に達して居ると言はれるが、所謂日本町なるものの設備には未だ〳〵見るに足るものが無い。中央亞細亞以西は言ふ迄もなく、今日東洋の主人たることを請求するものは、抱負の高い日本人でなくて事實アングローサクソンの民族である。是は必ずしも私の一家言でなく、多くの旅行者の點頭くところであらうと思ふ。斯樣な話をするとしよう。それにしても、曾てこの島國を離れたこともなく、上海の英租界を踏んだこともなく、香港、新嘉坡、其他の港々に於ける英吉利人の努力の跡を見たこともなく、日



上海

本は東洋の盟主であるとばかり力んで居るやうな人達に、どうしてこの激烈な人種の競爭を想像して貰ふことが出來よう。

南阿弗利加のケエプ-タウンから東を歸航して見ると、今更ながら英吉利の殖民地の發達には驚かされる。實際、殖民地を別にして今日の英吉利といふものは考へられないくらゐだ。今日の英吉利にあるやうな興味中心の藝術や、そこにある多くの冒險譚、成功談や、低級で卑俗な趣味を滿足せしめるやうなものは、廣大なる殖民地の發達及びその需要といふことから引放しては考へられないくらゐだ。私の寄つて來た亞弗利加、亞細亞の港々で彼等英吉利人の勢力範圍でない場所は無いと言つて可い。

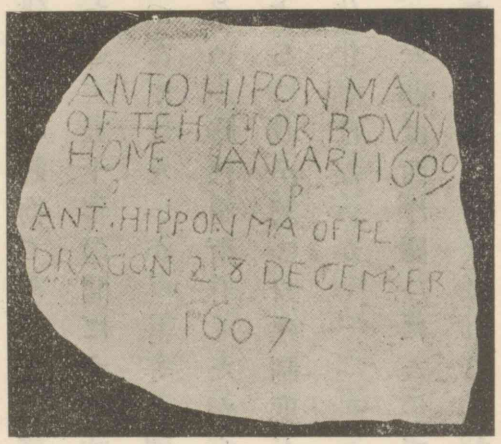


ケエプ-タウン

日本郵船の乘客としてすら、所謂英吉利のコロニストなるものの無遠慮で、横着で、成金的であるにも驚かされる。さういふ人達の跳梁する殖民地が旅して見て眞に樂しからう筈が無い。そこにあるものは、一切が金づくだ。金でも儲からなくて、誰が斯樣なところへ來るものかと言はぬばかりの人達の世界だ。そこに漂ふ空氣の死んだやうなのにも厭氣がさす。白人の奴隷をもつて甘んずる黑奴なぞはあさましいものだし、さうで無い土人は見ても可傷しい。外觀の繁昌と、內部の零落とは、私の行く先にあつた。上海まで歸つて來て、やゝこの心持は薄らいだ。吾等が故國に歸る樂しみは、實に生々として自由な空氣を吸ひ得るの樂しみである。

南阿弗利加博物館の藏版にかゝるものに、「極東への航路に於ける初代歐羅巴航海者が殘せし記錄」の一小册子がある。それを見

ると歐羅巴人が喜望峯の迂回を企てたのは、千四百八十五年あたりの昔からだといふことが出て居る。彼等の志はみな夢想の鄕なる「印度へ」といふにあつたことが出て居る。印度へ——支那へ——日本へ——さう思つてあの「黑船」が幾艘となくこの島國の近海に出沒した時代のことを振返つて見ると、吾等の先祖の中に澤山氣違ひが出來たといふも決して不思議は無いと思ふ。よくそれでもあの暗黑な時代にあつて、吾等の先祖が迫り來る恐怖を切拔けたものだといふ氣もする。幸ひにしてわが長崎は新嘉坡たることを免れたのだ。それを私は天佑の保全とのみ考へたくない。歷史的の運命

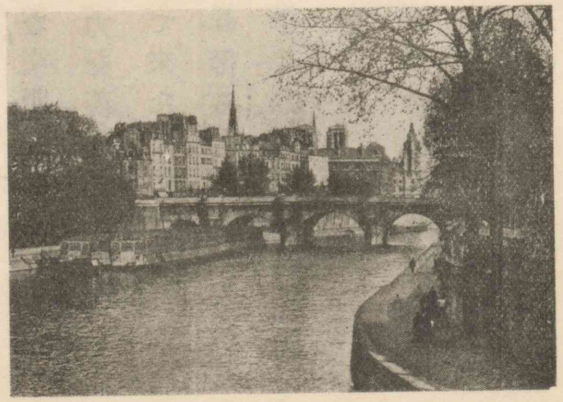


初代の喜望峯回航者等が石に記したし記錄の一部

の力にのみ歸したくない。その理由を辿つて見ると種々なことが有らうけれども、私はその主なるものとして吾が國が封建制度の下にあつたことを考へて見たい。實際吾が國の今日あるは封建制度の賜物であるとも言ひたい。破壞に繼ぐに破壞を以てした過去五十年の間にすら、活ける「過去」は猶吾等の內に働きつゝあつたではないか。吾等の國が印度でもなく支那でもないのは、かういふ時代を所有したからではないか。今日の日本文明とは、要するに我が國の封建制度が遺して置いて行つて呉れたものの近代化ではないか。

お前は西洋嫌ひになつて歸つて來たといふ評判だが、事實か、とある友人に私は尋ねられた。すくなくも自分の旅は辛かつたとは私は言つても、そのために西洋が嫌ひになつたかと聞かれては一寸當惑する。

私は佛蘭西だよりとして都度々々の旅の通信を東京朝日紙上に寄せた。あの手紙の全部が私としてはその一番好い返事だ。あれを書いた時も、今も、私の心持は變らずにある。あの巴里ポオル-ロワイアルの客舍の窓で、「自分は巴里を讃美する爲にこの机に對つて居るのでも有りません」とは書いたけれども、私がセエヌの河畔なぞを歩いて見る度に、佛蘭西人の組織的才能と、傳統を重んずるその冷靜な意志とに對して、尊敬と羨望の念に堪へなかつたことは、あの手紙の中に言つて寄した通りだ。そこにある歴史の尊重、學問の尊重、藝術の尊重は、實に想像以上であつた。今も猶私はあのラテンの民族の天才を



セエヌ河

愛する美しい精神を讃美するに躊躇しない。是程の自分がどうしてさう西洋嫌ひになつて歸つて來られよう。つく〳〵私は佛蘭西あたりにある歐羅巴のクラシカルな文明を、クラシカルでそして同時に近代的なあの大きな包容の力を羨んで來た。それだけ私は自分の國の方のことを考へ續けて來た。何一つ日本に好いものがあるか、何一つ世界に向つて誇り得るものがあるかと言ふ海外在留の同胞に邂逅ふ度に、吾等はさういふ破壞の思想からも、自分の國を護らねばならないと思つて來た。

さうだ、吾等日本人はまだ〳〵保守的だ。吾等に必要なことは國粹の保存でなくて、國粹の建設でなければならないのではないか。吾等はもつと〳〵歐羅巴から學ばねばならない。そして自分等の內部にあるものを育てねばならない。

—海へ—

一七　野に出でよ

島崎藤村

朝は再びこゝにあり。
埋れよ眠。行けよ夢。
諸羽うちふる雞は、
けふの命の戰鬪の
野に出でよ。野に出でよ。
草鞋とく結へ。鎌も執れ。

朝は我等と共にあり。
隱れよ、さらば小夜嵐。
咽喉の笛を吹鳴らし、
よそほひせよと叫ぶかな。
稻の穗は黃に實のりたり。
風に嘶く馬もやれ。

雲に鞭うつ空の日は、
人を勵ますその音は
流るゝ汗と膩との、
名も無き賤のもののふを、

語らず言はず聲なきも、
野山に谷に溢れたり。
落つるや何處、かの野邊に、
來りて護れ、軍神。

野に出でよ。野に出でよ。稲の穂は黄に實のりたり。
草鞋とく結へ。鎌も執れ。風に嘶く馬もやれ。

あゝ綾絹につゝまれて、爲すよしもなく寢ぬるより、
薄き襤褸はまとふとも、活きて起つこそをかしけれ。
口には朝の息を吹き、骨には若き血を纏ひ、
胸に驕慢、手に力、霜葉を履みて疾く來れ。
野に出でよ。野に出でよ。稲の穂は黄に實のりたり。
草鞋とく結へ。鎌も執れ。風に嘶く馬もやれ。

高山樗牛
名は林次郎
山形縣の人
文學博士
明治三十五年歿
（年三十二）

一八　眞理

凡て人は、その信ずる所を忌憚無く公表するの勇氣無かるべからず。己れはかく信ずれども他人は如何に思ふらむ、若し笑はることあらばなど思ひわびつらふは、なべて志弱く膽氣に乏しき人の常ならむかし。古よりかゝる、己れの固く信ぜる事を爲し得ざる人の大事を成就したる例無し。學者に於ても同じ事なり。

某の時己れ固く然りと信じたることは、その時そを然りと公言するに於て何の憚る所やある。人は己れの意識を超えて何事をか信じ得べきぞ。又某の時固く然りと信じたる事も、他の時然らずと固く信ずることあらば、その說を改むるに於て又何の憚る所やある。そを豹變なりと云ふは、思想の變遷てふことを解せざる人の言のみ。人智は生まれてより死ぬるまで斷えず進歩すること、猶哲學の思想が歷史と共に絕えず變遷するが如し。人間智に一定固着の眞理なるものの無し。この絕えざる進歩その物が卽ち眞理なりと知らずや。

もし學者にして一定渝らざる意見を樹てむとせば、そは臨終の

際に於てするの外無かるべし。又哲學者が歴史上に萬古不易の說を立てむとせば、そは歴史の終る時に於てするの外無かるべし。死は一人の思想を固定す、されど歴史の始めなく又終りなきを如何にすべきや。

高山樗牛

所詮眞理は變遷の外に無し。學者が客觀的に萬古易らざる意見を定むることは思ひもよらざるなり。されば人々その時々に固く然りと信ずる所を然りと公言するの外無かるべし。

かく言はば、その說旦暮に改まり、散漫として歸する所無かるべしと憂ふる者あらむか。さりながら愚昧輕佻の輩にこそかゝることもあらめ、苟も識見ある學者にありて、さる憂は萬々無かるべ

し。まこと學者と呼ばれむ程の人は、よしその說如何に渝るとも、一定必然の道によりて發達するものなれば、前なる說と後なる說とを繫ぎ考ふる時は、一部の小思想史を現ずべきなり。さればかかる學者の說は、その時に固まらざる代りに、その發達の道に於て定まれりと謂ふべし。古より大なる學者にありと謂はるゝは、この意味に於ての一定の意見なり。

今の學者がその信ずる所を公言するに憚るは、蓋しかく思へばなるべし。――吾が說は過去に於て變化し來れり、吾は今日現に固く信ずる所あれども、過去の例によりて類推する時は、是亦明日に到りて渝るやも測られず。されば吾今この所信を公言せば、そが萬一明日に到りて渝りたらむとき、變說として嘲けられむ。この嘲りを免れむには、吾は所信を枉げて非を遂ぐるの外無からむ、これともに吾が忍びざるところなり、如かず暫く緘默を守らむには

大佛次郎
本名野尻清彦
横濱市の人
文學者

――と。

かゝる緘默の謂はれなきことは、先に述べたる所にて明かなるべし。畢竟眞理には生命あり、人智の發達は卽ちそが現はるゝ所なり。かの博物學者がピンもて蝶や蜂を刺して動物の標本を作るが如き考にて、一定固着の眞理を捉へむとするは、いみじき誤解ならずや。世の學者がその固く信ずる所をだに公言し得ざる迄に怯懦なるは、所詮このいみじき誤解に本づく。彼等にしてその學者たるの天命を全うして人生の爲に盡すあらむと欲せば、先づこの大々的誤解を擺脫せざるべからず。

―樗牛全集―

一九　内藏助と主税

大佛次郎

大石内藏助は、火箸を取つて火をかきおこしながら、淋しく更けた秋の聲に聞き入つた。軒端の風鈴が、時折雨戸の外にかすかな音をたてる。これと、緣の下の虫の音が、この一夜の靜けさに深みを加へてゐるのである。

「主税は何をしてゐるのだらう。」

ふと内藏助はかう考へた。

部屋にゐた主税は、父親がのつそりとはいつて來たのを見た。

「どうだ。」

と内藏助はいつて坐つた。

主税はいくらかはにかんだやうに微笑して、書きかけてゐた手紙を伏せた。

「もう寢たがいい。」

内藏助は胸にうかんで來た言葉を、そのまゝ口にのぼせながら、ひよつとすると、主税の書いてゐた手紙が實家へ歸つてゐる母親や弟達にあてたものではないかと考へた。

内藏助はそれをきいて見ることをわざと避けた。何かしら、わが子に詫びなくてはいけないことがあるやうに考へられた。

「さびしくはないか。」

父親は暫くして慈愛をこめていつた。始めてわが子の顔をまともに見た。

「いゝえ。」

主税は、やはりはにかんだやうに、かう答へてそつと身を動かした。父は「母や弟達に會ひたくないか。」といふ言葉を、咽喉まであふれさせて、手のとどくところに重ねてあつた本を、だまつて膝の上に取上げた。

これをひろげて見て、それが子供らしい努力の跡を不審紙や點で示してある論語の本であることを認めて、父親は、夜毎にこの本を二人の間に置いて講釋してやつた、遠くもない過去のことを思ひ浮べないではゐられなかつた。その時分から見ると、この子は何と大人びて來たことであらう。まつたくあどけない子供であつたが……この一二年の間に大人びて來たことは驚くべきほどだつた。おれのこの齡頃には、慥かまだ、犬や小鳥を遊び相手で、いくさごつこが日課になつてゐたのだつた。

だまつてただ父親と一緒にゐることが樂しげな主税を、内藏助は感慨深く優しい目で眺めるのだつた。何かいつて、からかはうとしてゐるやうな微笑が、自然と口もとを動かして來る。この齡頃ではひと月が一年にもあたるのではないか。いや、しかし……軀よりも心持であつた。軀は大きくなつたといふだけで、まだ如何にも子供つぽい不態なところを殘してゐるが、近頃の心持の大人びたことはどうだらう。それも、あの大變があつてからである。復讐のことが、行く手にさだめられてからのことである。子供は

筆蹟

私ならざる事に
御座候故無二是
非一御斷申候、將
又大垣より御到
來之由、一樽並
麥麺一折被レ掛二
御意一思召寄忝
奉レ存候期二貴
面一御禮等可レ得
二貴意一候　以上
九月十三日
大石内藏介
普門院樣

子供なりに新鮮でゐて、傷つき易い心の皮膚に、かへつて鋭敏に感じたのだな。

あどけなかつた目が、大人のやうに濁ることはなしに、急に深い色をたゝへるやうになつた。かなしげにくもつてゐることも間々ある。決しておれからは聞かせはしないが、同志の不揃ひなこと、急進・穏和兩黨の軋轢、母や弟達と別れねばならぬ事情が、……ものの影が池にうつるやうに、この子の心の水面に何かを投げずにはゐなかつたのだ。

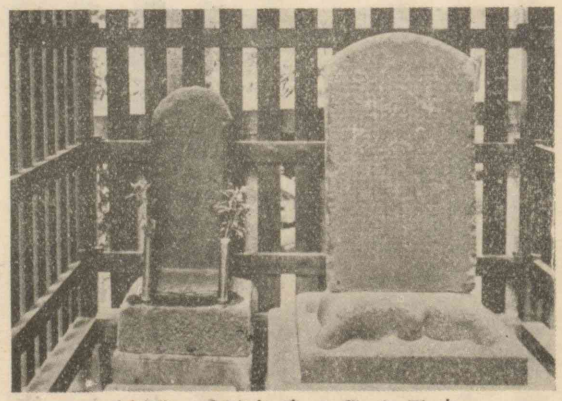
大石良雄筆蹟

知らなかつたのではない。おれは氣が付いてゐた……内藏助

は、非難に答へるもののやうに躍起とかう思ひながら、いぢらしさにふるへて、次第にうるんで來る胸を淡い悔恨に似たものにくるんで、見詰めてゐるのだつた。

その心持は、やがて、だまつて微笑してゐるだけの主税を眺めてゐる内に、これまでに育つた子を殺すのだと思ふ心持に變つた。

この子は何のために、漢籍を讀み、何のために修養に精進するのか。その苦勞をしてもしなくても、死は間近いところまで來てゐる。この若樹のやうに強健に立派に育つて來た肉體も、また正しからうと努めてゐるみづみづしい精一杯の心持も、死神の水のやうな手に握られて、瞬間にそ



大石主税の碑文（右）と墓（左）

のまゝに終るのではないか。この子は、そのことを考へてゐないのか。大人はいい。武士といふものの資格が、靜かに死につくだけの覺悟を養ふことにあると見てもよいし、風俗も習慣もその修養を助長するやうに出來てゐるのである。しかし子供は、大人とは別ではなからうか。まだ、それだけの覺悟を作る時間もあるまいにこの落著き加減は恐らく死といふことを知らないから來てゐるのではなからうか。

内藏助はいつた。

「毎日退屈はしないか。」

「いゝえ。」

と主税は答へた。

「することが澤山ございますから。」

「なにがそんなにある。」

「劍術……」

「それから。」

「主税は、父上のお供をしてまゐるまでに、出來るだけ澤山御本を讀んで置きたいのでございます。それから、ほかにもつとすることが澤山あるやうな氣がしてをります。」

「……」

さうだ、主税はいそがしかつた。人が五十年かゝつてやることを、殘つた僅かの時日の間にしてしまはなければならない。父親はつくづくとかう考へ、胸はいぢらしさに烈しく動いた。

主税はやはり、死ぬことなど別に氣にもとめてゐないのかも知れない。しかし、それにも拘らず近づいて來てゐる死が、たとへ間接にでも影をさして、この生活をあわただしくしてゐることかと思ふと、父親は胸の中で泣かずにはゐられないのだつた。—赤穗浪士—

榎本其角
寶井氏ともいふ
江戸の人
寶永四年歿（年四十七）

歳尾
元祿十五年

都文公
土屋主税
本所松阪町に住む

堀部彌兵衛
名は金丸

大高源五
名は忠雄
子葉と號し俳諧をよくした

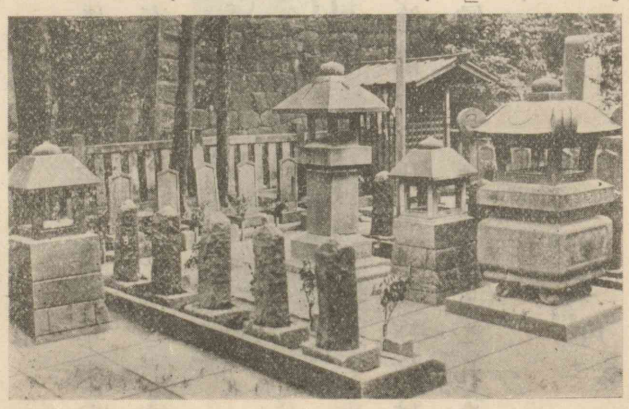
二〇　義士討入を報ず

榎本其角

歳尾の御壽として、例年の如く、遠路の處酒料一封、蕗の鹽漬一桶贈り下され、御厚志の程幾久しく受納致し候。御序に御家内始め御社中へも宜しく御傳へ下さるべく候。然れば、去る十四日本所都文公に於て年忘の一興御催あり。嵐雪、杉風、我等も一席にて、折から雪面白く降り出し、風情手に取るがごとく、庭中の松は雪を戴き、雲間の月は闇を照らし、風興今は捨て難くして夜だ更けゆき、最早丑三つ頃になり、犬さへ吠えず打ち靜まり、文臺、料紙も押し片寄せ、四五人集まりて蒲團を被き、夢の浮世といふ間もあらせず劇しく門を叩く者兩人玄關に案内し、「我等淺野家の浪人堀部彌兵衛、大高源五、今夕御鄰家吉良上野介屋敷へおし寄せ、亡君年來の遺恨な果さんため、大石内藏助始め四十七人、唯

吉良殿
名は義央

今吉良殿を討ち取り候間、御鄰家の御好み、武士の情、萬一御加勢も候はば、末代の御不覺と存じ奉り候。願はくは門戸を嚴しく御防ぎ、火の元御用心下され候はば、忝く存じ奉り候」といひも果さず立ち出づる、その風情、神妙なる事いふべくもあらず。今は俳友も是迄なりとて、其角幸に爰にあり、生涯の名殘を見んとて門前に走り出づれば、各〻吉良家に忍び入り候程に、わが雪と思へば輕し笠の上と高々と一聲よばはり、門を閉ぢて内を守り、塀越に提燈ともし、始終を伺ふに、その寒さ骨身に浸み、女人の叫、童子の泣聲、風飄々と吹き誘うて、曉天に至りては、本懷已


赤穗義士の墓

に達したりとて、大石主税、大高源五、物穏便に謝儀を述べたること、あつぱれ武士の譽といふべし。

日の恩やたちまち碎く厚氷

申し捨てたる源五が精神いまだ眼前にのこり候。貴公年來の御入魂ゆゑ、具に認め進じ申し候。早春の内かれこれ御さしくり御出府候はば、かの落著も承り屆け、餘儀なく伏劍に及び候はば、竊に追善をも相營み申すべく存じ候。まづは餘日もこれなく、書外貴面の時を期し候。恐恐謹言。

十二月二十日　其角

文璘様

其角筆蹟

筆跡
夜も既に明て水鶏の行衛哉　其角

木曾
源義仲
壽永三年戰死

長坂
山城國愛宕郡小野郷より丹波へ通ずる路

龍華越
山城國愛宕郡大原より近江國和邇郡龍華へ通ずる道

月雪の中や命の捨てどころ

二一　木曾殿の最期

（平家物語）

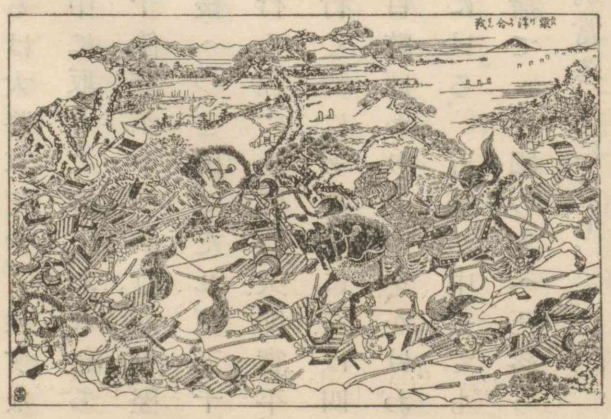
木曾は長坂を經て丹波路へとも聞ゆ。龍華越にかゝつて、また北國へとも聞こえけり。かゝりしかども今井が行方のおぼつかなさに、取つて返して、勢多の方へぞ落ち行きたまふ。今井の四郎兼平も、八百餘騎にて勢多を固めたりけるが、五十騎ばかりに討ちなされ、旗をば捲かせて持たせつゝ、主のゆくへのおぼつかなさに、都の方へ上るほどに、大津の打出の濱にて、木曾殿に行きあひ奉る。中一町ばかりより互にそれと見知つて、主從駒を早めて寄り合うたり。

木曾殿、今井が手を取つてのたまひけるは、「義仲六條河原にていかにもなるべかりしかども、汝がゆくへのおぼつかなさに多くの

敵に後を見せて、これまで遁れたるはいかに。」とのたまへば、今井の四郎、「御諚まことにかたじけなう候。兼平も勢多にて討死仕るべう候ひしかども、御ゆくへのおぼつかなさに、これまで遁れ參つて候。」と申しければ、木曾殿、「さては契りは未だ朽ちせざりけり。義仲が勢山林に馳せ散つて、この邊にも控へたるらんぞ。汝が旗上げさせよ。」とのたまへば、捲いて持たせたる今井が旗さし上げたり。これを見つけて、京より落つる勢ともなく、また勢多より參る者ともなく、馳せ集まつて、程なく三百騎ばかりになり給ひぬ。

木曾殿なのめならずに喜うで、「この勢にては最後の軍一軍などかせざるべき。あれにしぐらうて見ゆるは誰が手やらん。」「甲斐の一條の次郎殿の御手とこそ承つて候へ。」「勢はいかほどあるらん。」「六千餘騎と聞え候。」「さては互によい敵、同じう死ぬるとも、大勢の中にかけ入り、よい敵に逢うてこそ討死をもせめ。」とて、眞先きにぞ進み給ふ。

木曾殿その日の裝束には、赤地の錦の直垂に、唐綾縅の鎧着て、いかもの作りの太刀を佩き、鍬形打つたる兜の緒をしめ、二十四さいたる石打の矢の、その日の軍に射て、少々殘つたるを頭高に負ひなし、滋籐の弓の眞中取つて、聞こゆる木曾の鬼葦毛といふ馬に、金覆輪の鞍を置いて乘つたりけるが、鎧ふんばり立ち上がり、大音聲をあげて、「日頃は聞きけんものを、木曾の冠者、今は見るらん、左馬の頭兼伊豫の守、朝日の將軍源の義仲ぞや。甲斐の一條の次郎とこそ聞け　義仲討つて兵衞の佐に見せよや。」とて、喚



粟津合戰　（古版源平盛衰記挿繪）

いて駈く。

一條の次郎これを聞いて、「只今名乗るは大將軍ぞや。餘すな者ども、漏らすな若黨、討てや。」とて、大勢の中に取りこめて、われ討ち取らんとぞ進みける。木曾三百餘騎、六千餘騎が中へかけ入り、竪ざま、横ざま、蜘蛛手、十文字にかけ破つて、後へつと出でたれば、五十騎ばかりになりにけり。そこを破つて行く程に、土肥の次郎實平、二千餘騎で支へたり。そこをも破つて行く程に、あそこにては四五百騎、こゝにては二三百騎、百四五十騎、百騎ばかりが中を、かけわりかけわり行く程に、主從五騎にぞなりにける。五騎が中までも巴は討たれざりしが、その後、物の具脱ぎ捨てゝ、東國の方へぞ落ち行きける。手塚の太郎討死す。手塚の別當落ちにけり。

木曾殿、今井の四郎、たゞ主從二騎になつてのたまひけるは、「日頃は何とも覺えぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや。」とのたまへば、今井

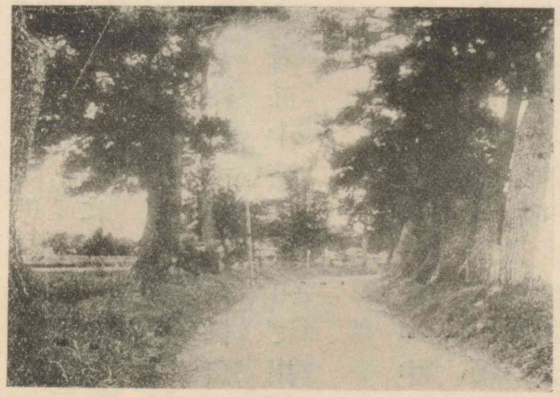
の四郎申しけるは、「御身も未だ疲れさせ給ひ候はず、御馬も弱り候はず、何によつて一領の御きせながを、俄に重うは思召され候べき。それは御方につゞく勢が候はねば、臆病でこそ、さは思召し候らめ。兼平一騎をば餘の武者千騎と思召し候べし。こゝに射殘したる矢七つ八つ候へば、暫らく防矢仕り候はん。あれに見え候は、粟津の松原と申し候。君はあの松の中へ入らせ給ひて、靜かに御自害候へ。」とて、打つて行くほどに、また新手の武者五十騎ばかりで出で來る。

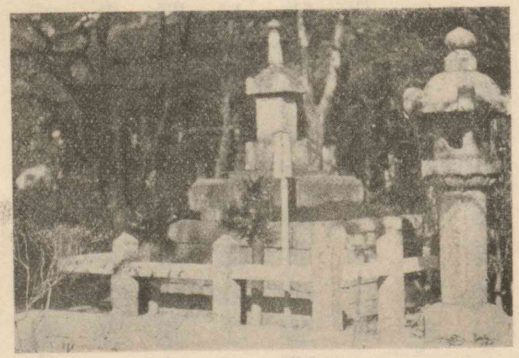
兼平は、「この御敵、暫らく防ぎ參らせ候べし。君はあの松の中へ入らせ給へ。」と申しければ、「義仲六條河原にて、いかにもなるべかりしかども、汝と一所でいかにもなりなんためにこそ、多くの敵に後を見せて、これまで逃れたんなれ。所々で討たれんより、一所でこそ討死をもせめ。」とて、馬の鼻を並べて、既に懸けんとし給へば、今井

の四郎急ぎ馬より飛んで下り、主の馬の水づきに取りつき、涙をはらはらと流いて「弓矢取は年頃日頃、いかなる高名候へども、最期に不覺しぬれば、長き瑕にて候なり。御身も勞れさせ給ひ候ひぬ。御馬も弱つて候。いふ甲斐なき人の郎等に組み落されて、討たれさせ給ひ候ひなば、さしも日本國に鬼神と聞えさせ給ひつる木曾殿をば、何某が郎等の手にかけて討ち奉りたりなんど申されんこと、口惜しかるべし。たゞ理をまげて、あの松の中へ入らせ給へ。」と申しければ、木曾殿さらばとて、たゞ一騎、粟津の松原へぞ駈け給ふ。

今井の四郎取つて返し、五十騎ばかりが勢の中へかけ入り、鐙ふんばり立ち上り、大音聲をあげて、「遠からん者は音にも聞け、近からん人は目にも見給へ。木曾殿の乳母子に、今井の四郎兼平とて、生年三十三にまかりなる。さる者ありとは、鎌倉殿までも知ろしめされたるらんぞ。兼平討つて兵衛の佐殿の御見參に入れよや。」とて、射殘したる八筋の矢を、さしつめ引きつめ、さんざんに射る。死生は知らず、矢庭に敵八騎射落し、その後太刀を拔いて切つて廻るに、面を合する者ぞなき。たゞ、「射取れや、射取れ。」とて、さしつめ引きつめさんざんに射けれども、鎧よければ裏かゝず、明間を射ねば手も負はず。

木曾殿はたゞ一騎、粟津の松原へ駈け給ふ。頃は正月二十一日、入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたりけり、深田ありとも知ら


粟津の松原


木曾義仲の墓

ずして、馬をさつと打ち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。あふれどもあふれども、打てども打てども動かず。かゝりしかども今井が行衛のおぼつかなさに、ふり仰ぎ給ふ所を、相模の國の住人、三浦の石田の次郎爲久追つかゝり、よつぴいてひやうと放つ。木曾殿内兜を射させ、痛手なれば兜の眞甲を馬の頭におし當てゝ、うつぶし給ふ所を、石田が郎等二人落ちあひて、既に御首をば賜はりけり。やがて首をば太刀の先に貫き、高くさしあげ、大音聲をあげて、「この日頃、日本國に鬼神と聞こえさせたまひつる木曾殿をば、三浦の石田の次郎爲久が討ち奉るぞや。」と名乘りければ、今井の四郎は軍しけるが、これを聞いて、今は誰をかばはんとて軍をばすべき。これ見給へ東國の殿ばら、日本一の剛の者の自害する手本よ。」とて、太刀のきつさきを口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける。

鶴見祐輔
岡山縣の人
政治家
安奉線
安東奉天間の鐵道
京奉鐵道
北平奉天間の鐵道

二二　平原を行く

鶴見祐輔

峻嶺雲に迫る朝鮮半島を縱斷し、安奉線を一睡の間に駛り拔けて、奉天で京奉鐵道の列車に乘換へた瞬間から、旅行者はその身の支那大陸に在ることを痛感する。滿目の荒蕪が、前後とそして左右とに限なく續く。幾里かの無人の田畑を隔てゝ點在する村落の家々は、黃褐色の土で固めて、死んだ樣に黑ずんだ瓦を戴いて居る。楊の木のみが蒼々と茂つて、一道の生氣をこの籬落と平原とに與へて居る。見渡すかぎり赤土の平野の間に折折人の頭のみが見える。その頭は悠々と一定の速度を以て赤土の上を進行して行く。汽車の近づくに從つて、その頭の前に連なる一群の驢馬と馬と牛との姿が見られる。それは低く陷つた道路である。修繕することなしに幾世紀の使用に任せた支那道路は、肩を沒する

三皇　太昊伏羲氏　炎帝神農氏　黄帝軒轅氏
五帝　少昊金天氏　顓頊高陽氏　帝嚳高辛氏　帝堯陶唐氏　帝舜有虞氏
哈爾賓　滿洲國松花江の中流にある都會
營口　滿洲國遼河口にある港

程の深さにへこんで居る。その先祖の轍の刻んだ險惡な道路の上を支那の農夫が三皇・五帝の昔ながらに、彈機の無い支那車の上に乘つて、種類の異なる五六頭の動物を御しながら無關心に駛つて行く。この茫々たる平原の中にこの車を驅つて、彼等は哈爾賓から營口まで七百哩の道を、ごく僅かの賃銀で大豆を運んで來たのであつた。

その無限の曠野、その底知れぬ忍耐力、支那大陸の自然と人間が不可思議の壓力を以て遊子の心魂に迫つて來る。纖麗なる日本の自然と怜悧なる日本の人間との環境を脱し來つて、一晝夜にして、かくの如く大なる自然と人間生活とを見れば、如何にして相互無關心に、相互不感染に存在しながら、三千年の國交を續けたのであらうかと疑はしくなる。支那の環境と支那の文明とを、新しき心眼を開いて見ることの必要が沁々と遊子の胸臆に迫つて來る。

佛蘭西の女流小説家クールヴァンは彼の女の英國紀行に題して「見知らぬ國」と言つた。廿二浬の海を隔てゝ二千年の親交を結ぶ英國と佛蘭西とが互に「見知らぬ國」であつたならば、十二萬方哩の小國なる日本と、四百萬方哩の大國なる支那との關係は、更により以上「見知らぬ國」である。同文同種と言ふ抽象的な概念的な標語に累せられて、日支兩國民は、あまりに相知つたと自惚れ過ぎた。相似ざる隣人達が、異なる環境に異なる文明を抱いて生活しながら、相似たる者の如くに振舞つた。その間から幾多の禍が渦卷き起つた。似ざる者の間に起る精神的反撥と物質的乖離とを一時の權宜と半呑半吐の好意とを以て繋ぎ合せようと、大勢の人々が騒ぎ犇めいた。その焦燥と失望と憤懣との凡ての記録の外に超然として、支那の農夫は昔ながらに五頭の動物を驅りつゝ深さ丈餘にも及ぶ支那路の上を悠々と大豆を運んで行く。

停車場に車の駐まる度毎に、旅客はプラットフォームにおり立つて見馴れぬ光景を凝視する。四尺程の毛布を卷いたのを肩にして、黑ずんだ地の垢に穢れた着物を着、群集を押しのけ突飛ばしながら來るのは支那人の乘客である。耳も聾するばかり大聲に喚き立て怒鳴り立てゝやむこと無きは物賣である。未だ富を爲さゞりし幼年時代の紀文大盡が、竹製蜻蛉を賣歩いた樣な恰好をして、小串の尖端に小さい白綿を着けたのを、十幾本も藁の棒に刺して、ふらり〳〵と車窓の外を歩いて居る子供は、耳搔賣である。その喧騒と雜沓と不統一との壓卷として、黑帽黃線の巡警がけろりかんと立つてゐる。

車が山海關に着く時分には、陽はとつぷりと「天下第一關」の後に落ちて、秦皇の覇圖と現代支那の混沌とが遊子の心眼の中にのみ甦つて來る。

—思想・山水・人物—

紀文大盡
紀國屋文左衞門
德川時代の富商

山海關
中華民國直隸省の東端
萬里の長城の起點

秦皇
秦の始皇帝

賀茂眞淵
遠江國の人
國學者
歌人
明和六年歿（年七十三）

筆蹟
ワタノハラトヨサカノボル
渡乃原豐榮登
アサヒコノミカゲカシコキ
朝日子能御影恐支
ミナヅキノソラ
六月廼空　眞淵

二三　近世の歌

賀茂眞淵

殘の雪

めづらしと見そめし程になりにけり
遠山のまに殘るしらゆき

眞淵筆蹟

花の歌とて

うらゝとのどけき春の心より
匂ひいでたる山ざくらばな

加藤千蔭

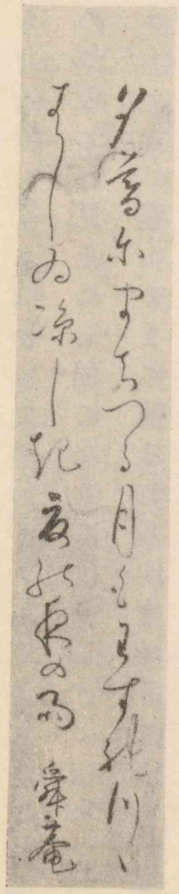
春風來ル海上ヨリ

加藤千蔭
橘千蔭ともいふ
芳宜園と號す
賀茂眞淵の門人
國學者
歌人
文化五年歿（年七十四）

本居宣長
鈴の屋と號す
伊勢國松坂の人
國學者
歌人
享和元年歿（年七十二）

筆蹟
夕暮にまちつる
月もわすれつゝ
はしゐ涼しき夏
の夜の雨　舜菴

二見潟こちふく風にあけそめて
　神代のまゝの春は來にけり
名所春曙
ほのぼのと明けゆく空もむらさきに
　匂ふや春のむさし野の原
年の始によめる　本居宣長
さしいづる此の日の本の光より
　こまもろこしも春を知るらむ


宣長筆蹟

羈中眺望
富士の根は雲の絶間に見えそめて

香川景樹
桂園と號す
因幡國鳥取の人
歌人
天保十四年歿（年七十六）

井手曙覽
橘曙覽ともいふ
歌人
明治元年歿（年五十七）

いくかになりぬ東路のそら
　朝鶯　香川景樹
限りなき春のねぶりもさめにけり
　あしたのどけき鶯のこゑ
事につき折にふれたる
山吹の花ぞひとむら流れける
　いかだのさをや岸にふれけむ
春よみける歌の中に　井手曙覽
すく〳〵と生ひ立つ麥に腹すりて
　つばめ飛び來る春のやま畑
山家
白雲のゆきかひのみを見送りて
　今日もさしけり蓬生のかど

太田垣蓮月
名は誠
女流歌人
若くして尼になり千種有功の門に學ぶ
明治八年歿（年八十五）

野村望東尼
筑前國福岡の人
女流歌人
慶應三年歿（年六十二）

筆蹟
山さくら日本こころの清ければ
ちるもひらくもなづみ無して
望東

春夕月　　太田垣蓮月

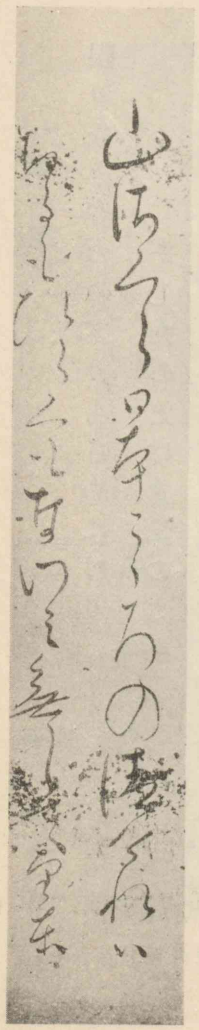
ありあけの霞に匂ふ朝もよし
きさらぎ頃のゆふづきもよし

雨中蓮　　野村望東尼

ふるとしも見えぬ小雨をうけためて
をりくこぼす池の蓮葉

山里にゆきて

ほたるとぶかげも涼しき山川を
ゆひ隔てたる里のしばかき



望東尼筆蹟

菜洗ふに

島木赤彦
本名久保田俊彦
長野縣の人
歌人
大正十五年歿（年五十一）

萬葉集
二十卷
わが國最初の歌集

古今集
醍醐天皇の延喜五年紀貫之等が勅を奉じて撰した歌集

川の瀬に洗ふかぶらの流れ菜を
追ひあらそひて行く家鴨かな

二四　日本の民謡

島木赤彦

日本民族には、太古から日常の感情を歌謡にうつして、自ら口に歌ひ、且又對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謡の中で、ある特別な形式を備へたものは、移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るに、この萬葉集時代に、緊張の頂點まで達した短歌が、古今集以後の勅選に至つて、著しく弛緩の情態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生み出された歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴

勅撰集時代
醍醐天皇の時古今和歌集を撰せしめられてから後花園天皇の時新續古今集を撰せしめられた時まで約五百三十年間をいふ
神樂歌
神樂に合せて歌ふ歌
催馬樂
雅樂の一種

族社會の玩弄物であつて、その出來方も、緊張した感情から生み出されると言ふよりも、外形を整へるに苦心して作り出されたもので、內面の空疎と萎縮とは、當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳はらずに、却つて短歌の形を存してゐないその當時の民謠に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生れた短歌の精神が、民族的歌謠の一分流であるところの民謠に合流してゐることは、決して不自然ではない。

このことは、勅撰集時代の、その背後に存してゐたと思はれる神樂歌や催馬樂歌の中に現れてゐる民謠を檢べて見れば、容易にうなづくことが出來るのである。

笹分けば袖こそ破れめ、利根川の石は踏むともいざ河原より

しながどり猪名の湊に入る舟のかぢよくまかせ舟かたぶ

乳が崎
大島の西北端

くな、若草の妹も乘せり我も乘りたり

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謠から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以て、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。さうして、この民謠の系統は、足利・德川の各時代を經て、順次に發達推移して今日に及んでゐるのである。

然らば、それ等の民謠の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に產み出したところの、惻惻として人の心を動かす力を持つ情調である。農民の唄ふ歌謠には、のん氣に似て、その底には重々しい調子がこもつてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くの漂泊のやるせない哀音がこもつてゐる。

乳が崎沖まで見送りましよが、それから先は神だのみ

（伊豆大島）

淺間
淺間山
長野縣と群馬縣との境に跨る活火山

碓氷越
碓氷は碓氷峠
群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との境にある

追分
長野縣北佐久郡にある町

坂本
群馬縣碓氷郡にある町
碓氷峠の東麓にあたる

中仙道
東山道を經て江戸から京都へ行く街道

の唄の如き、必ずしも船頭とばかりは言へぬが、海中の孤島に賴りなく住む人々の心理が、「神だのみ」の哀音となつて現れてゐる純粹さを味ふべきである。

淺間の煙が北へと靡く、今宵泊らにや雨になる。

一誦して、淺間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬子の唄であることがわかるではないか。淺間の裾野には追分の宿場があり、碓氷峠の下には坂本の宿驛があつて、いづれも中仙道の旅人の一夜の泊場であつた。

そこの宿引の女が、旅人を呼びとめて、一宿を勸める心がこの

輕井澤
長野縣北佐久郡東長倉村

唄の心である。一夜の宿を勸める歌謠を、勸められる旅人や馬子が自ら唄つて、自分の境遇を辛うじて慰めてゐるところが、哀な漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂、下るは輕井澤、追分の曠野である。見上げる空には、いつも淺間の煙が靡いてゐる。煙は高く南へ靡く。風が北になれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和は雨となる。「今宵泊らにや雨になる」は、この嶮坂を上下する脚絆・草鞋の身には、決して戲れの問題ではないのである。

麥ついて夜麥ついてお手にまめが九つ、九つのまめを見れば親里がこひしや。

麥をつくのは農家の新婦である。嫁入して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとゞ落ち着かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をついて掌に出來

人麿　柿本人麿　歌人　持統・文武兩朝に仕へた

貫之　紀貫之　平安朝時代の歌人

たまめを眺めて、親里を思ふ痛切さは、恐らく人麿・貫之の秀歌にも優るものがあらう。

これ等の唄は、その生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が抒べられてゐる。さうして、民謡としての生命も、全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理や感情を表す民謡ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐると言ひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くも土の個性を離れることは出來ない。その土地の持つ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謡に、強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。「乳が崎沖まで」の唄が島に生れ、「淺間の煙」の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生れ、「麥ついて」の唄が伊豆南方の田舍に生れてゐることを考へ合せると、民謡と地方との關係を、ほゞ推測することが出來よう。

稲生澤村　靜岡縣下田町の北にある

たゞ、民謡の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少くない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れては行かれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れて來る。例へば、「麥ついて」の歌は甲斐の南方では、

大麥ついて麥ついて、お手にまめを九つ、九つのまめを見れば、親の在所こひしよ

と唄つてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味はれる。

この苗をとりあげて、どこに棲まずや、いなごや、きりすゝきすき葦のこやのうらに棲まずや

これは、伊豆の南方の稲生澤村の苗取唄である。思ふに、この歌

謠は、決して近代のものではない。少くとも平安朝時代か、或はそれ以前に生れたものが、その優れた秀でた調子を持つが爲に、南方の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち滿ちてゐる。この美しい心情を持つた民謡が、今日の日本に殘つてゐて、現在農夫の口に唄はれてゐることは、民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。かつたすすきや、結きあんだ葦の小屋の中に、自分とともに住まないか」といふそのこゝろは、なんといふ單純な、同情の籠つた、愛を滿ちたこゝろであらう。

自然の中に愛に包まれて、その日の勞働をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心を持つ農夫の生活が、涙ぐましいまでに尊い。

「この苗を取りあげて」は、原作は勿論「この稻を取りあげて」であつて、

八ヶ嶽
長野縣と山梨縣との境にある山

淺間山

それが苗取唄に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地方にも殘つてゐるが、唄の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し二の坂越して三の坂越し
や强清水

これは信濃國の民謡中、出色の一つである。草刈馬に乘つて八ヶ嶽の裾野を上る。一の坂がある、二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの强清水が湧いてゐるといふ意で、草刈の男女に唄はれることによつて、こ

の唄の趣が深い。さうして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖いが、山國の明るさは寒い。それが、これ等民謠の中にも現れてゐるのである。

三宅雪嶺
名は雄二郎
金澤市の人
文學博士

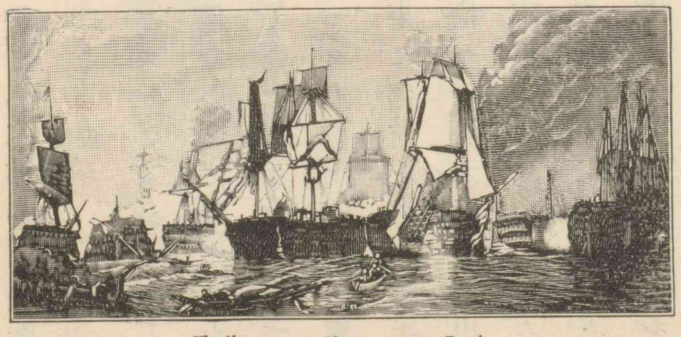
二五　勝　敗

三宅雪嶺

英國現皇帝ジョージ五世の座右の銘若干條の中に、「勝ち得るならば、勝つべきことを私に教へたまへ、勝ち得ないならば私に良い失敗者たるやうに教へたまへ。」といふのがある。平凡の如く聞えるけれど、太陽の沒しない領土に君臨し、この邊に考へ及ばずに居られないであらう。勝ち負けといつても、勝ちらしい勝ちが少く、負けて尤もと思はれるのも少い。勝つならば、勝ちらしい勝ちを得べきであり、負けるならば、萬已むを得ない方法に於てすべきであつて、それがむづかしい。

近世英國で戰勝の最も赫々たるは、ネルソンのトラファルガーに於てしたのを指す。敵の艦隊を全滅し、もはや敵に襲はれる怖れがなくなつた。ネルソンの期待は、勝つとか負けるとかと云ふのでなく、敵を全滅せねばならぬとした。味方に何程の損失あらうとも、敵を全滅し、後の害を除かうとし、その目的を達した。それで今でもトラファルガーの海戰が昨今のことのやうに考へられる。

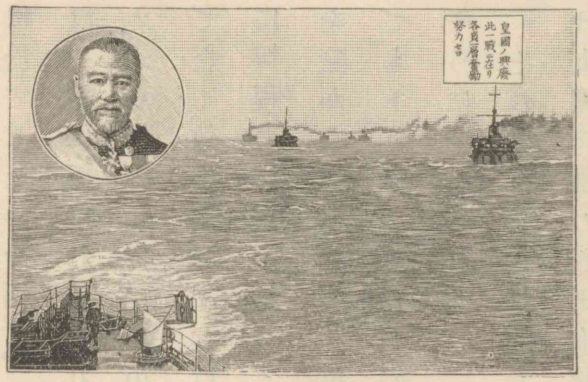
その後百數十年間、これに比較すべき決戰は、東鄕元帥の對馬海峽に於てしたのであつて、正に東西に對立することゝなつた。かの



トラファルガーの海戰

海戰は實に敵の艦隊を全滅し、絶對に回復を許さなかつた。戰勝は彼の如くならねばならぬ。

敵の司令長官ロゼストウェンスキーは捕虜となり、哀れ儚ない姿になつたものゝ、爲すべきを爲したことを打消してはならぬ。バルチック海を出で、遠く喜望峰を越え、遙々極東に廻航し、そこで手ぐすね引いて待ち構へた日本艦隊に出會ひ、勝利を得るは不可能に屬してゐる。旅順艦隊が存在するならば未だしも、その全滅後日本海を通つて浦鹽に到着を企つるは冒險に過ぎるでないか。日本艦隊に出會へば、散々な目に遭はずにをれぬ。それでも日本を苦しめたこと一通りでない。



東郷大將と日本海海戰

露が對馬海峽から進むか、北海道方面より進むか、大抵前者と思はれるも、さうばかりと決定してはならぬ。そこで謂はゆる東郷の七段返しとなり、次から次と用意せねばならぬ。露は日本を焦らしに焦らし、大抵よからうと對馬海峽に乘り込んだが、そこは段違ひの圍碁とて、運盡きて全滅した。併し、ロゼストウェンスキーは歸國し、軍法會議に廻されて放免になつた。これを旅順要塞司令官ステッセルに較べれば、よい負け方とせずにおけぬ。

ステッセルは日本軍に大損害を與へたので、日本ではロゼストウェンスキーより以上に評判になつてをるが、軍法會議に廻はされ、死刑を宣告され、次いで禁錮十年に減刑され、それが十五ケ月で放免された。ステッセルとても相應に働いたのであり、唯、ロゼストウェンスキーに較べ、爲すべきを爲して居らなかつた。一は良い失敗者たるに近く、一はさう云ふを得ない。

成功者の多くは、早晩失敗者と共に忘れられてしまふ。成功して時めくと、失敗して倒れると、記錄の上で特別の異同がない。要は爲すべきを爲すと否とに在る。トラファルガーで英將ネルソンは戰死しても爲すべきを爲してをり、佛將ヴィユヌーヴは無事でも捕虜となり、翌年放免されて自殺した。ワーテルローでナポレオンが負けても、將略に於て敵將ウエリントンに劣らぬのみか、幾等か之に優るを證明した。東洋で諸葛亮や、岳飛や、楠木正成や、西郷隆盛など、大成功者であり、最も良い失敗者である。特に戰爭について述べたが、一切の成功及び失敗はこれに準じて考へ得られる。

ワーテルローの戰

帝國新國文 卷六 終

帝國新國文　卷六

昭和七年十一月一日印刷
昭和七年十一月四日發行
昭和八年八月二日訂正印刷
昭和八年八月五日訂正發行

定價　金五拾六錢

編者　藤村作

發行者　東京市神田區仲猿樂町三〇　株式會社帝國書院　代表者　增田啓策

印刷者　東京市牛込區山吹町一九八　山本禎男

發賣所　東京市神田區仲猿樂町三〇　株式會社帝國書院　振替口座東京六七〇四

關西販賣所　大阪市東區横堀四ノ三　三宅莊藏書店　振替口座大阪六九

帝國新國文　卷六

昭和七年十一月一日印刷
昭和七年十一月五日發行

定價　金　拾　六　錢

今田禮吾

専二